

K-612

袖原3遺跡

発掘調査報告書

2002

尾花沢市教育委員会

袖原3遺跡

発掘調査報告書

2002
尾花沢市教育委員会

巻頭図版 1



袖原 3 遺跡遠景（東から）



袖原 3 遺跡近景（南から）

巻頭図版 2



石器（RQ13）出土状況（発見時・北から）

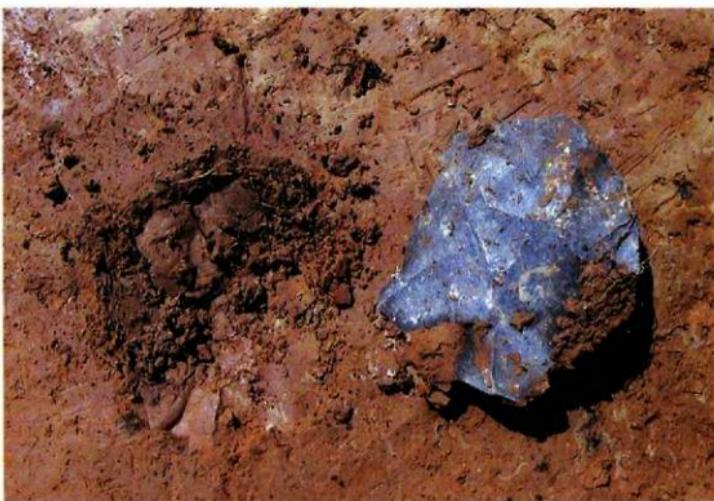


石器（RQ13）出土状況（発見時・南から）
石器と土の間に隙間があり、根が入っている

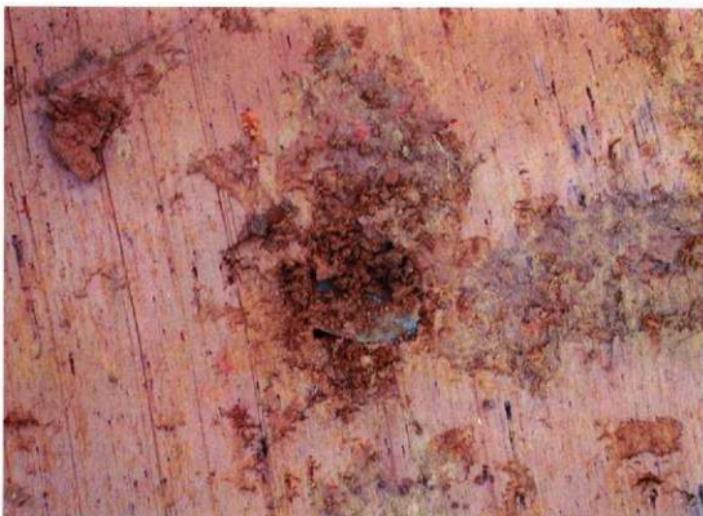
巻頭図版 3



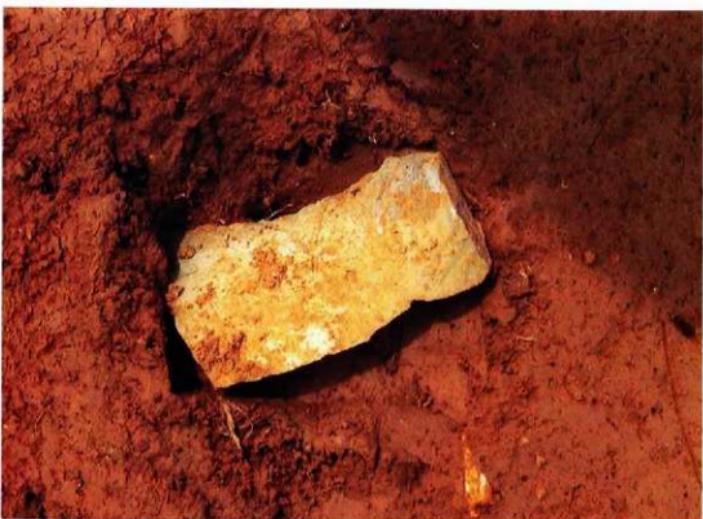
石器（RQ13）出土状況（東から）
石器と土の間にはっきりと隙間が見える



石器（RQ13）をひっくり返したところ、インプレントがなく、
空間があり、泥や根が詰まっている。

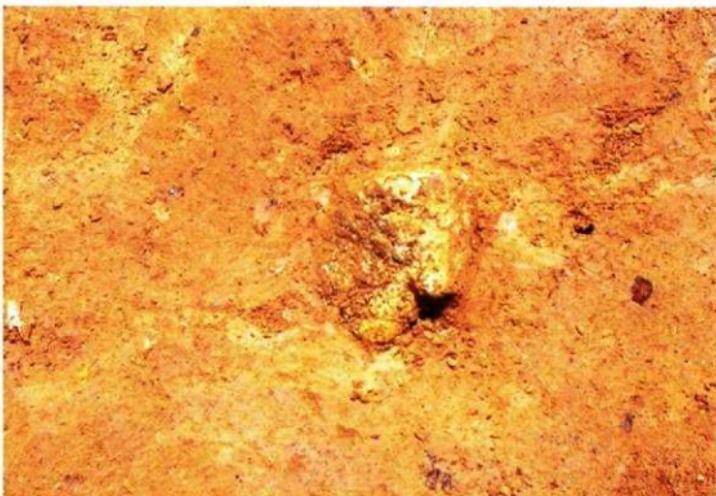


石器（RQ14）出土状況（発見時・北から）
重機で動かされている。



石器（RQ14）右下に移植ゴテのような
物で掘り込んだ痕がある。

巻頭図版 5



礫出土状況、自然の状態で埋まっている礫
にクラックが切れずに達している。



石器（RQ15）出土状況（南から）
石器の周囲がやわらかくボソボソしている。

巻頭図版 6



石器（RQ13）捏造痕跡 インプリントがなく、移植ゴテのような物で掘った痕がわかる。

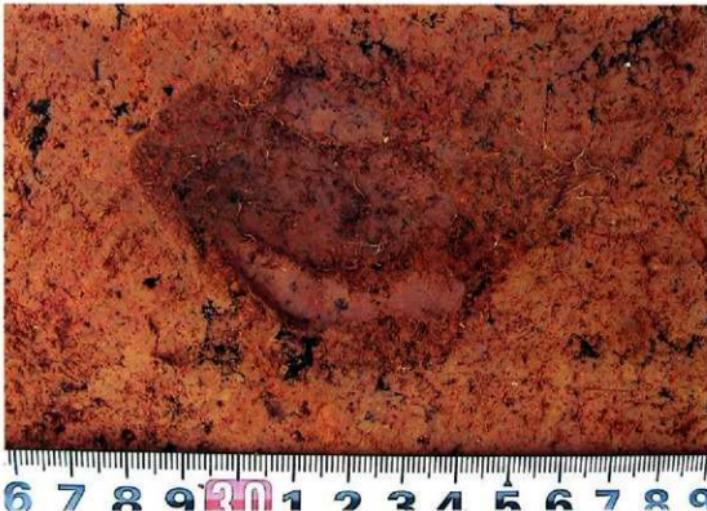


石器（RQ14）捏造痕跡 石器の下に移植ゴテのような物で掘った鋭い跡がわかる。

巻頭図版 7



石器（RQ15）捏造痕跡 下に大きな空間と
根や泥が入っているのがわかる。



石器（RQ15）捏造痕跡 中央に大きく移植
ゴテのような物で掘り込んだ跡がわかる。



出土石器（左からRQ13・14・15）



出土石器（同上腹面）

序

本報告書は、尾花沢市教育委員会が平成13年度に実施した、国宝重要文化財保存整備事業に関わる袖原3遺跡の発掘調査の結果をまとめたものであります。

平成12年11月5日の東北旧石器文化研究所元副理事長の上高森遺跡における、遺跡捏造の報道は我が尾花沢市においても衝撃的な事件として伝わり、ただならぬ緊張感が走った記憶がございます。袖原3遺跡は元副理事長が深く関わった遺跡の一つであり、地元でも不安が広がり、袖原3遺跡は遺跡であるのか否かをはっきりさせるべきという市民の声も多々ございました。

教育現場におきましても、非常に混乱をまねき、子供達への対応に悩まされつつも、真実を伝えることは教育の本務であります。

発掘調査の結果は、袖原3遺跡を遺跡と認め得る証拠は何一つ見つかりませんでした。このことは、非常に残念無念なことであります。事実は事実として認識しなければなりません。また、逆に教育行政自らの手で遺跡でないことを確認できたことは、真実を明らかにし、未来へ新たな一歩を踏み出したものと信じます。

今後、これを契機に埋蔵文化財に対する保護事業はもちろんのこと多様な文化財保護事業が停滞するようなことがないよう、一層努力して参りたいと考えております。

最後に、調査にあたって多大のご協力、ご指導を賜りました関係各位に対し心から感謝申し上げます。

平成14年3月

尾花沢市教育委員会
教育長 石山敬二

例　　言

- 1 本書は、平成13年度国宝重要文化財保存整備事業係る袖原3遺跡発掘調査報告書である
- 2 発掘調査は平成13年度に尾花沢市教育委員会が主体となり、山形県教育委員会社会教育課文化財保護室、財団法人山形県埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名	袖原3遺跡
所在地	山形県尾花沢市大字延沢字袖原2622番地
調査期間	平成13年4月1日～平成14年3月29日
現地調査	平成13年6月11日～平成13年7月21日
発掘調査担当	
調査主体	尾花沢市教育委員会
調査検討委員	明治大学教授 戸沢充則（委員長） 東北学院大学教授 佐川正敏（副委員長） 奈良教育大学教授 長友恒人 古環境研究所 早田 勉 山形大学助教授 八木浩司
調査担当	尾花沢市芭蕉・清風歴史資料館運営係長 大類 誠 山形県教育庁社会教育課文化財保護室文化財専門員 佐藤庄一 財団法人山形県埋蔵文化財センター調査第四課長 渋谷孝雄
調査事務局	尾花沢市教育委員会社会教育課長 森山 実
調査補助員	尾花沢市教育委員会社会教育課長補佐 大高正史
調査従事者	大場正善 鈴木 雅 田中恵子 五十嵐キヨシ 五十嵐哲郎 五十嵐正志 石川清作 海藤信也 伊藤エチノ 伊藤キヨ子 伊藤 進 伊藤千代子 鈴木理矩治郎 土屋 雅 土屋守男 元木正志 松本和華子（以上地元）内田 仁 工藤 陽 沼田綾子 兵藤真理恵 北條佐和子 三浦 実（以上学生）

- 4 本書の作成・執筆・編集は大類誠が担当し、一部田中恵子が補佐した。
- 5 発掘調査にあたり、本来ならご指導、ご協力をいただいた方々を、ここに記して感謝申し上げるところですが、非礼をお詫びするとともに、発掘調査をご快諾いただいた地権者の草刈武氏、鈴木敬治郎氏や日本考古学協会及び同協会「前・中期旧石器問題調査研究特別委員会」総括部会・第2作業部会等数え切れないほどの個人や団体よりご指導、ご協力をいただき心より感謝申し上げます。
- 6 図版作成にあたり、梶原洋氏より第1次～5次調査で出土した石器について写真撮影並びにその掲載の許可をいただいた。記して感謝申し上げます。
- 7 火山灰の理化学分析は古環境研究所に、捏造痕跡と土層剥ぎ取りは東北芸術工科大学の松井敏也氏に各々業務委託した。

8 出土遺物、調査記録類については、尾花沢市教育委員会が一括保管している。

凡　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類番号は次のとおりである。
S = 石・礫 R Q = 登録石製品
- 2 遺物の番号は石・礫・登録石製品に関係なく通し番号とした。
- 3 掘図の縮尺は不統一であり、その都度スケールで示した。
- 4 土の色調の記載については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の2001年版『新版標準土色帖』に掲った。

目 次

I 調査の経緯	
1 はじめに	1
2 調査に至るまでの経過	1
3 調査の方法と経過	4
II 遺跡の立地と環境	8
III 遺跡の概観	
1 遺跡の層序	11
2 調査の概要	12
1・2区	
3区	
4区	
5区	
6区	
7区	
8区	
深掘区	
3 捜査痕跡	27
4 出土石器	28
IV まとめ	33

表

表1 袖原3遺跡周辺の遺跡 ······ 10

挿図

第1図	袖原3遺跡位置図	9
第2図	袖原3遺跡層序模式図	14
第3図	袖原3遺跡調査区設定概念図	15
第4図	袖原3遺跡調査区設定図	16
第5図	袖原3遺跡土層平面図	17
第6図	砾出土分布図	18
第7図	1区土層断面図	19
第8図	2区土層断面図	20
第9図	3区土層断面図	21
第10図	7区土層断面図	22
第11図	8区平面図	23
第12図	8区土層断面図	23
第13図	深掘区土層断面図	25
第14図	石器(RQ13)出土状況図	29
第15図	石器(RQ14)出土状況図	30
第16図	石器(RQ15)出土状況図	31
第17図	石器実測図	32

図 版

- 卷頭図版 1 袖原 3 遺跡遠景・近景
卷頭図版 2 石器 (RQ13) 出土状況
卷頭図版 3 石器 (RQ13) 出土状況
卷頭図版 4 石器 (RQ14) 出土状況
卷頭図版 5 碟・石器 (RQ14) 出土状況
卷頭図版 6 石器 (RQ13・14) 捺造痕跡
卷頭図版 7 石器 (RQ15) 捺造痕跡
卷頭図版 8 出土石器

図版 1 袖原 3 遺跡遠景・清掃風景
図版 2 発掘風景
図版 3 1区・2区
図版 4 2区土層の広がり
図版 5 3区・4区
図版 6 ベルトの精査・完掘状況
図版 7 ベルトの完掘状況
図版 8 7区南壁・西壁土層断面
図版 9 8区完掘状況・炭化物分布状況
図版 10 7区・深掘区土層剥ぎ取り
図版 11 2区 S8・9の出土状況
図版 12 深掘区東壁・北壁土層断面
図版 13 深掘区南壁・西壁土層断面
図版 14 調査区全景
図版 15 第1文化層出土石器
図版 16 第1文化層出土石器
図版 17 第1文化層出土石器
図版 18 第1文化層出土石器
図版 19 第1文化層出土石器
図版 20 第1文化層出土石器
図版 21 第2文化層出土石器
図版 22 第3文化層出土石器
図版 23 第4文化層出土石器
図版 24 第4文化層出土石器
図版 25 第4文化層出土石器
図版 26 第4文化層出土石器

- 図版 27 第4文化層出土石器
図版 28 第5文化層出土石器
図版 29 第6文化層出土石器
図版 30 第7文化層出土石器
図版 31 第8文化層出土石器
図版 32 接合石器

I 調査の経緯

1 はじめに

日本最古の遺跡、70万年以前の前期旧石器時代に我が国にも人類が存在したとして、世界的にも注目されていた宮城県塙館町の上高森遺跡で、2000年（平成12年）11月5日毎日新聞社は東北旧石器文化研究所の藤村氏が、発掘面に石器を次々と埋めていく姿を報じ、遺跡が捏造されている事實を明らかにした。さらに、北海道の縦進不動坂遺跡の捏造も認め、日本全国の考古学研究者はもちろんのこと、考古学ファン、各行政機関等に大きな衝撃を与えた。

また、北海道縦進不動坂遺跡、宮城県上高森遺跡の捏造問題は、両遺跡にとどまらず、東北旧石器文化研究所の藤村氏が関わったそのほかの旧石器時代の遺跡にも疑惑がもたれ、前期旧石器時代の遺跡の根本的な見直しが迫られ混迷を深めた。袖原3遺跡も藤村氏が深く関わった遺跡の一つで、10万年前の遺跡とされる宮城県色麻町の中島山遺跡出土の石器と接合したことでの注目を浴びたが、捏造疑惑の渦中にあった。

袖原3遺跡は、袖原遺跡調査団によりこれまで1993年以降5次にわたる発掘調査が実施され、第1文化層から第8文化層まで合わせて209点の石器が出土している。しかし、捏造問題を孕み遺跡に対する評価は定まっていない現状であった。そこで、遺跡としての位置づけ学術的な意義を確認するため、総合的な発掘による調査が必要と考え今回の発掘調査を実施した。

2 調査に至るまでの経過

今回の発掘調査は、行政にとってかつてない緊張感と複雑な思念の中で準備をすすめ、発掘調査を実施した。それまで経過をたどることは、単に発掘調査を実施したという事実以上に、行政がいかなる対応のもとですすめてきたか大事な調査のプロセスになるので、世の中の動向と合わせて概略する。

2000年11月4日（土）東北旧石器文化研究所の藤村氏は、仙台市のホテルで、毎日新聞社取材に対し、宮城県の上高森遺跡と北海道縦進不動坂遺跡の捏造を認める。また、この二遺跡以外の捏造はなかったと強く否定する。

同年11月5日（日）藤村氏は宮城県庁で記者会見し、上高森遺跡と縦進不動坂遺跡の捏造を認め、「魔がさしてやった。お詫びの言葉も見つからない」と謝罪する。

袖原3遺跡に関しては捏造はなかったと否定する。

同年11月6日（月）東北福祉大学の梶原教授が尾花沢市長を訪ね、「捏造は上高森遺跡と縦進不動坂遺跡の二ヶ所以外はやっていないという本人の言葉を信じたい。しかし、袖原3遺跡の発掘調査に汚点がついてしまったことは間違いない。関係者の皆さんに多大なご迷惑をおかけしたことをお詫びしたい」と陳謝する。

これに対し市長は「報道で知りたいへん驚いている。来年に予定されている第6次調査については事実の究明と推移を見守りながらお願いすることになるだろう」と述べる。その後の記者会見で、梶原教授は「1997年10月の調査で約30キロ離れた宮城県色麻町の中島山遺跡のものと接合した石器については、尾花沢市教育委員会の担当者が掘り出したもので、中島山遺跡の石器は地表約1メートルほど掘り下げた数十点の中の一つが接合したもので、発掘状況には不自然な点はなかった」と説明する。

さらに、「事情が許せば来年度も調査を行い石器が出てくることを証明したい」と語る。これに対し教育長は、「第6次調査に関しては事態の推移を見たうえで、調査体制等の具体的な検討をしたい。」と語る。

同年11月7日(火)梶原教授は共同通信社に対し「上高森遺跡と総進不動坂遺跡の2遺跡以外100パーセント捏造はなかったと、論理的に言い切ることはできない」と述べ、さらに「検証は県などの第三者が入ってもらいたい。人為的に細工できない深い場所から石器が出るのを確認したい」と語る。

同年11月9日(木)梶原教授は山形県教育庁を訪ね木村教育長に陳謝するとともに、「袖原3遺跡の信頼回復のために検証する必要がある」と述べ、県教委に対し協力を要請する。これに対し、木村教育長は「尾花沢市教委と連携し協力できる部分は手を貸したい。ただ、当面は事態の推移を見守りたい」と述べ、協力に応じる姿勢を示す。

同年11月10日(金)市教委で臨時教育委員会を開催し、捏造問題で揺れる袖原3遺跡の取り扱い方について討議され、その結果、藤村氏を抜いたうえで、梶原教授を中心とする調査団の第6次調査には、遺跡の信頼回復という意味でも協力していくことを確認する。ただし、調査団のメンバーに市職員を加えた体制を整えることも確認する。

同年11月13日(月)市の臨時議会で、捏造問題で袖原3遺跡のについて質疑があり、一議員より「このままでは不信感はぬぐえない。疑惑を晴らすには、検証調査しかない。一日も早くはっきりさせるべき」と緊急質問が出される。これに対し、市長は「早い段階での調査が必要と考える。県や調査団と話し合って決める事になる」と述べ、教育長は教育委員会の討議を踏まえ「6次調査にはこれまでどうり協力をう。県の協力については、専門職員に公平な立場で加わってもらうことが考えられる」と述べる。同日、高橋知事の定例記者会見で、「不信感を払拭するためには、検証する必要があると考えており、県としても協力したい」と語り、支援する考えを表明する。

同年11月14日(火)文化庁は、捏造問題で東北旧石器文化研究所の藤村氏が直接関わった8都道県について、各都道県の検証発掘の要望があれば調査費の半額を補助(国庫補助)する方針を決める。また調査のねらいについては、藤村氏が発掘したとき、不審な点がないかを調べるのがねらいで、関係者の証言を求めたり、必要があれば石器発見場所の隣接地を中心に発掘調査する見解を示す。

同年11月17日(金)文化庁で各都道府県の埋蔵文化財担当者会議が開催され、今回の捏造問題で、藤村氏が関与した遺跡の検証発掘調査については、ものを冷静に見る点からいって第三者が調査することが望ましいとし、東北旧石器文化研究所のメンバーがその検証

調査に関わることは、世論からいって納得してもらえる状況ではないと判断されるので、調査体制については十分かつ慎重にお願いしたい旨の説明がある。

同年11月22日（水）県文化財課より連絡が入り、去る11月17日に開催された埋蔵文化財担当者会議の内容を知らされ、市教委としても、袖原3遺跡の発掘調査については、十分検討し配慮してほしい旨の申し入れを受ける。

同年11月24日（金）市の担当者は東北福祉大学の梶原教授を訪ね、文化庁が開催した会議の内容を伝え、市の立場や意向について説明したところ、「袖原3遺跡の発掘調査については、尾花沢市に全てお任せいたします」という姿勢を示される。

同年12月2日（土）県文化財課専門員と市担当者が現地を訪ね、現況と今後の袖原3遺跡に対する取り扱いについて、事務レベルで打合せをする。現時点で、藤村氏が関与した遺跡は全て検証すべきという文化庁及び日本考古学協会の動きの中で、第三者が発掘調査して検証することが最も妥当な方法であろうと考えられ、県教委としても協力できるところは協力し、調査体制については慎重かつ十分に配慮すべき意見がかわされる。飽くまでも事務局レベルになるが、可能であれば市教委としても国庫補助を受け、前向きに考えていくことが必要であろうとされた。前向きに対応することを前提に、発掘調査体制、調査費用、調査区の設定、調査期間などを具体化する方向で話し合われる。

同年12月16日（土）日本考古学協会は東京都内で委員会を開き、「前・中期旧石器問題調査研究特別委員会」を来年の5月の総会後発足することを決定し、12人の準備委員会委員を選出した。協会としては、同協会が直接調査を主導するのではなく、各地の自治体や研究団体がおこなう調査を支援し適切な助言をしていく形をとるとし、特別委員会は5年をめどに調査結果をまとめる方針を打ち出す。これに対し、市でも協力を得られるような方向で県教委と協力しながら検討を進める。

同年12月18日（月）東北旧石器文化研究所の藤村氏が共同通信の取材に応じ、「捏造は上高森遺跡、縦進不動坂遺跡の二ヶ所以外はやっていない」と改めて強調する。

これより2001年（平成13年）1月中に、袖原3遺跡の発掘調査の調査体制、調査費用調査区設定、調査期間、調査の方法等細部にわたり、県教委と相談しながら具体化していくことになった。

2月に入り、特に調査体制において、発掘調査の客観性を保つため発掘調査検討委員会を設置することになり、県教委と相談のうえ交渉を始める。その結果、戸沢充則（明治大学教授）、佐川正敏（東北学院大学教授）、長友恒人（奈良教育大学教授）、早田勉（古環境研究所前橋研究所長）、八木浩司（山形大学助教授）の5氏より快諾を得る。

第1回目の発掘調査検討委員会を、3月29日（木）午後から開催し、第1次から第5次調査までの調査の経過とその結果、調査団より提出された日誌等を分析し、事実を一つ一つ確認することから始め、袖原3遺跡の概要を把握する。

3 調査の方法と経過

第6次調査は、第1次調査から第5次調査で得られた資料をもとにし、平成13年6月1日（月）から7月21日（土）まで実日数29日間の調査を実施した。調査区を設定するにあたり、6月1日（木）発掘調査検討委員会の打合せを現地で行い、検討委員長戸沢充則、同副委員長佐川正敏、早田勉の3氏、調査員佐藤庄一、渋谷孝雄、大類誠とともに、鎌田俊昭、梶原洋2氏より同席していただき助言をいただいた。

調査にあたり、調査区は（第3図）適宜1区から8区としたが、5次までの調査で袖原遺跡調査団が遺跡全体に設定した2m×2mグリッドの番号（第4図）をいかし、それに合わせて調査区を設定した。

なお第1次から第5次調査の状況は下記のとおりである。

年次年月日	調査面積	石器出土点数
第1次調査：1993年4月28日～5月9日	約200m ²	32点
第2次調査：1994年4月28日～5月8日	約200m ²	93点
第3次調査：1996年10月4日～10月14日	約80m ²	32点
第4次調査：1997年10月3日～10月14日	約100m ²	43点
第5次調査：1999年11月1日～11月8日	約60m ²	9点

調査日記抄

袖原3遺跡の発掘調査は6月11日より7月21日までの期間で実施したが、その経過について調査日誌を簡単にまとめたので、それを紹介する。

5月28日（月）〈曇り〉午前中、袖原遺跡発掘調査団によって、第1次・2次調査で発掘された区域を測量し、それに沿って杭打ち作業を実施する。

6月5日（火）〈晴れ〉遺跡の入口等に砂利を敷く。

6月7日（木）〈曇り後雨〉午前中、第3次～第5次調査区の水抜きをする。遺跡までの案内板の設置をしながら遺跡に通ずる山道を整備する。

6月8日（金）〈晴れ〉午前中、現場事務所及び機材置場となるハウス2棟を設置する。午後簡易トイレを設置し、第3次～第5次調査区の周間に安全柵を設ける。

6月11日（月）〈曇り後晴れ〉本日より調査を開始する。まず遺跡の草刈を行い、午前10時より発掘式を挙行、安全を祈願する。それより、再び遺跡全体の下草刈りをする。午後より、遺跡の南側露頭斜面のシートをはずし、斜面の精査をする。

6月12日（火）〈晴れ〉第3次～第5次調査区のシートをはずす作業、午前中いっぱいかかる。午後より残り半分をはずし発掘面を出す。また、南側露頭斜面の精査を進めると同時に土層の線引きをする。

6月13日（水）〈晴れ後曇り〉第3次～第5次調査区の発掘面及び壁の清掃を集中的にやり土層の線引きをする。

午後より、第1次・2次調査の区に発掘区を設定する。深掘区の崩落した土砂の除去作業をする。

6月14日（木）〈雨〉雨天のため調査は中止するが、水の溜まる状況を見て水抜きをする。

6月15日（金）〈雨〉今日も雨天のため調査は中止するが、水を抜く。深掘区周囲が雨のため一部崩落の危険が生じたため、安全柵の範囲を広げ設定しなおす。

6月16日（土）〈曇り時々晴れ〉調査は休みであるが終日水抜きをする。

6月18日（月）〈晴れ〉第3次～第5次調査区の清掃及び壁面の精査をする。深掘区東壁崩落面より岩片が出土する（第30層：第7文化層より上面）。

午後より新たに設定した発掘区1・2区に重機を入れ表土を剥ぐ。その後、ジョレンで面を精査していく。午後7時過ぎ菊地強一氏が来跡され、ご指導をいただく。礫や岩片の状態を見ていただいたところ、いたって自然な状態で層の中に含まれているとのこと。

6月19日（火）〈雨〉雨天のため調査中止。水だけ抜く。

6月20日（水）〈雨後曇り〉1・2区の調査に入るが雨で作業が中々進まず泥との格闘が続く。第3次～第5次調査区の平面図作成と共に、深掘区出土の礫と岩片を図面に落とす。

午後より1・2区をジョレンで精査し土層の広がりを見る。さらに、1区を北側に2m×6mの範囲で拡張する。佐川正敏委員来跡す。午後4時より礫と岩片が出土したことについて記者発表する。

6月21日（木）〈曇り後晴れ〉1・2区の精査を終え土層の広がりを見る。北側から南側に7層～14層まで順に帯状の広がりを確認し平面図を作成する。

第3次～第5次調査区の面精査をする。午後より、1区は7・8・9層を剥いでゆき、2区は8層より剥いでいく。深掘区東壁より新たに2点の岩片が出土する。佐川正敏委員来跡し深掘区の土層堆積の精査をする。

6月22日（金）〈晴れ〉深掘区の精査をする。梶原洋氏来跡し、深掘区の層序についてご指導をいただく。1区は8層を掘り下げ、2区は10層～11層（第1文化層）の精査に入るが、遺物は出土せず。

深掘区より2点の岩片が出土（32層上面、33層）する。

山田晃弘氏来跡す。

6月25日（月）〈雨〉雨天のため調査は中止する。水抜きだけする。

6月26日（火）〈曇り〉調査区の水抜き作業より開始。1区は9層の発掘に入る。ここでは北側に急激に傾斜していることがわかる。2区は11層～14層の平面的な広がりを確認し、11層から順に掘り進めていくが、遺物は出土せず。

第3次～第5次調査区の西側を拡張し3区とする。3区で15層、16層上面（第2文化層）と掘り進めるが遺物は出土せず。

文化庁主任文化財調査官岡村道雄氏来跡す。

6月27日（水）〈曇り時々雨〉1区は9層を掘り進める。2区は12層上面を精査するが、

遺物は出土せず。3区は1・6層、1・7層を完掘し、1・8層上面（第3文化層）まで達し、精査するが遺物は出土せず。

袖原3遺跡が発見される（1992年6月14日）きっかけとなった露頭面を精査し、石器出土地点を確認する。（断面採集地点）

6月28日（木）〈晴れ後曇り〉第3次～第5次調査区の水を抜き、深掘区は東西南北壁面の精査する。東壁の3・2層上面より3点の小礫出土する。1区は水没のまま。2区に土層観察のため幅50cmのサブトレーナーを入れる。3区は精査を終了するが、遺物出土せず。第3次～第5次調査区のなかで、集中的に出土した地区を4区とし精査するが、遺物は出土せず。阿子島功氏來跡す。

6月29日（金）〈晴れ後曇り〉1区を9層～10層まで、2区を11層上面まで、4区は2・2層を掘りあげるが、遺物は出土せず。3区は完掘する。深掘区の東壁に検出した礫類を図面に落とす。

午後より、発掘調査検討委員会を現地で開催する。深掘区の礫類を検討していただかが、人工のものでないことで一致する。

6月30日（土）〈曇り〉1区はようやく12層上面に達するが、北に向かって急傾斜している様子を確認する。2区を12層上面まで、4区を2・3層まで下げるが遺物は出土せず。

午後より、日本考古学協会「前・中期旧石器問題調査研究特別委員会」総括部会一行が、見学に来られる。また、同総括部会の方々から、今まで出土した石器209点についても検討いただかが、多くの石器が不自然な褐鉄やガジリ等が見られるという意見がだされる。

7月2日（月）〈晴れ〉1区の北壁・西壁土層断面図作成及び掘り下げる。深掘区の土層線引き及び礫類を取り上げる。

7月3日（火）〈晴れ〉2区を1・3層まで下げ駄目押しをやるが、遺物出土せず。2区の礫群の平面図作成。

7月4日（水）〈雨〉終日水抜きをやる。

7月5日（木）〈晴れ〉1区を掘り下げる。新たに設定した1・2区の調査区と、以前調査された第1次・2次調査区の境がわからず、また、層の広がりを見るため、第1次・2次調査区の埋め土を重機で除去し、旧発掘面を出す。発掘面を精査したところ午後1時3分頃、頁岩性の剥片（RQ13）が出土する。剥片は発見した状況でそのままで保管する。

袖原3遺跡発見の契機となった断面採集地点の脇にグリットを設定し、重機で7層（成層）上面まで除去する。深掘区の土層断面図作成作業。

7月6日（金）〈曇り時々雨〉第1次・2次調査区の西側に、5区を設定し発掘を進める。また、新たに発掘区6区を設定し精査する。

昨日に引き続き重機で第1次・2次調査区の埋め土を除去し、発掘面を精査したところ、午前1時50分頃頁岩製の剥片（RQ14）が重機に引っか

かり出土する。さらに、午後3時45分頃、流紋岩製の剥片（RQ15）が出土する。2点とも発見した状況で保護する。深掘区の土層断面図作成作業をする。鎌田俊昭、梶原洋両氏来跡す。

7月7日（土）〈快晴〉RQ13～15の石器をそのままにし、第1次・2次調査区の精査をする。5区を12層中まで掘り下げる。6区は9層～12層中まで掘り下げる。7区を9層まで掘り下げる。各区とも遺物は出土せず。

佐川正敏委員、菊地強一、柳田俊雄、山田晃弘各3氏が来跡し、3点の石器の出土状況を観察したところ、人為的に埋められたものと見解を示す。

7月9日（月）〈快晴〉1区の掘り下げ。5区を13層まで下げるが遺物は出土せず。
7区を9層下部まで下げる。

袖原3遺跡発掘調査検討委員会戸沢充則委員長、佐川正敏副委員長と、前・中期旧石器問題調査研究特別委員会第2作業部会長白石浩之氏が参加し3点の石器の出土状況を観察したところ、やはり、人為的に埋めこまれたものと判断する。

午後3時より記者発表し、3点の石器については人為的に埋めこまれたものと判断し、袖原3遺跡については、現段階では前・中期旧石器の遺跡として位置づけるのは非常に困難であるという見解を示す。

7月10日（火）〈快晴〉1区を掘り下げる。3区を19層上面まで掘り下げるが遺物は出土せず。5区を16層上面まで下げるが遺物出土せず。7区を10層上面まで下げる。

RQ13～15の石器について、出土状況並びに、人為的に埋めこまれた痕跡を観察しながら、図面化し取りあげる。

7月11日（水）〈晴れ〉1区の土層観察のため12層まで掘り下げる、土層断面図を作成する6区を12層まで下げるが遺物は出土せず。7区は10層下部まで掘り下げる。8区（接合石器出土地点）を設定し7層まで掘り下げる。

7月12日（木）〈曇り〉1・2区の土層断面図作成。8区を10層まで掘り下げる。深掘区の東西南北の各壁面の土層断面図作成。東北芸術工科大学の松井敏也氏より、三ヶ所の捏造痕跡を切り取ってもらう。

7月13日（金）〈曇り時々雨〉発掘調査中止。東北芸術工科大学の松井敏也氏等切り取りした捏造痕跡の保存処理作業。午後より、現地説明会の資料作成をする。

7月14日（土）〈晴れ〉7区を12層上面まで精査するが、遺物は出土せず。8区を10層上面まで精査するが、遺物は出土せず。昨日に引き続き松井敏也氏切り取りした捏造痕跡の保存処理作業。深掘区の土層断面図作成をする。

稻田孝司・木村英明両氏来跡す。

7月15日（日）〈晴れ〉7区の12層を精査するが、遺物は出土せず。8区10層下部まで精査するが、遺物は出土せず。発掘面全域を清掃する。

松井敏也氏より、深掘区・7区の土層断面剥ぎ取りをやってもらう。

- 午後1時30分より現地説明会を開催し、約150名の参加があった。
- 7月17日（火）〈晴れ〉発掘調査区の水抜きをやる。1・2区と1次・2次調査区の間にあ
るベルトをはずし精査する。7区の1・2層を精査するが、遺物は出土せず。
8区を1・1層下部まで精査するが遺物は出土せず。
- 7月18日（水）〈晴れ〉昨日に続きベルトを精査するが、遺物は出土せず。7区1・2層下部
まで精査するが、遺物は出土せず。8区を精査したところ、炭化物の広がり
を確認し土層を剥ぎ取る。7・8区の土層断面図作成。
- 7月19日（木）〈曇のち晴れ〉全区の水抜き。調査区全域を清掃し写真撮影をする。7区を
1・3層まで、8区を1・2層中面まで精査するが、遺物は出土せず。
- 7月20日（金）〈晴れ〉8区を1・3層上面まで駄目押しするが、遺物は出土せず。遺跡内の
清掃し機材を点検する。
- 7月21日（土）〈晴れ〉発掘機材を洗浄し、午後より機材を搬出して発掘調査を終了する。
- 7月24日（火）〈曇り〉早田勉委員、八木浩司委員土壤のサンプリングをおこなう。
- 8月2日（木）〈曇り〉奈良教育大学長友研究室土壤のサンプリングをおこなう。
- 8月3日（金）〈晴れ〉遺跡を埋め戻す。
- 8月4日（土）〈晴れ〉遺跡を埋め戻し整地する。

II 遺跡の立地と環境

袖原3遺跡は山形県尾花沢市大字延沢字袖原2622番地に所在する。尾花沢市街地から直
線距離にして、南東に約5.2kmほどいった標高約220mを測る丘陵地に立地する。遺
跡は、南から北に緩やかに傾斜する丘陵となっており、北面する立地となっている。周囲に
は旧石器時代の遺跡として袖原1・2・4・5・6遺跡や徳良湖の北西に浦山遺跡があると
いわれている。このうち袖原1遺跡は以前から縄文時代の遺跡として周知されていた袖原F
遺跡とだぶり、袖原F遺跡からは縄文時代早期の土器や石器が発見されている。

袖原3遺跡周辺で発見されたとされる袖原1・2・4・5・6遺跡（袖原遺跡群）につい
ては、周辺の地形変化が著しく、古い地形図と現地観察を重ねないと地形の復元が非常に難
しい状況である。以前は総合パイロット事業で桑園が地形の傾斜に合わせた形で造成されて
いた。しかし、安価な外資系の生糸が輸入されると次第に桑園は廃れ、土地利用が大きく変
化せざるを得なくなってきた。その結果、野菜畑や西瓜畑に利用されるようになると、重機
によって地形は大きく削られ谷は埋められ平坦にされ、あるいは山を削り低い方に土砂を押
し整地され、新しい畠地へと変化していった。このような事情のさなかで、次々と発見され
てきた袖原遺跡群を見た場合、遺跡が縄文時代であるとか、旧石器時代であるか否かは別と
して立地論に関しては非常に注意しなければならない点がある。

しかし、同じ周間に立地する縄文時代の遺跡袖原A・B・C・D・E・F遺跡や松山遺跡
(第1図：表1)は、さほど大きな地形の削平はなく、遺跡が本来もっている立地条件を分析
することが可能である。今回立地論は別として、長根山丘陵といわれる150m～250mの



第1図 袖原3遺跡位置図

1:25,000 尾花沢・延沢

	遺跡名	所在地	時代(時期)・備考
1	袖原1遺跡	尾花沢市大字延沢字袖原	旧石器時代 袖原F遺跡と地点がたぶる
2	袖原2遺跡	尾花沢市大字延沢字袖原	旧石器時代
3	袖原3遺跡	尾花沢市大字延沢字袖原	旧石器時代
4	袖原4遺跡	尾花沢市大字延沢字袖原	旧石器時代
5	袖原5遺跡	尾花沢市大字延沢字袖原	旧石器時代
6	袖原6遺跡	尾花沢市大字延沢字袖原	旧石器時代
7	浦山遺跡	尾花沢市大字尾花沢字浦山	旧石器時代
8	浦山北遺跡	尾花沢市大字尾花沢字浦山	縄文時代中期
9	赤森山A遺跡	尾花沢市大字尾花沢字赤森山	縄文時代前期
10	赤森山B遺跡	尾花沢市大字尾花沢字赤森山	縄文時代中期
11	徳良湖A遺跡	尾花沢市大字二藤袋字徳良池	縄文早・前・後・晚期、平安
12	徳良湖B遺跡	尾花沢市大字二藤袋字徳良池	縄文時代前期
13	徳良湖C遺跡	尾花沢市大字二藤袋字徳良池	縄文時代中期
14	荒井森遺跡	尾花沢市大字二藤袋字荒井森	縄文時代中期
15	袖原A遺跡	尾花沢市大字延沢字袖原	縄文時代
16	袖原B遺跡	尾花沢市大字延沢字袖原	縄文時代
17	袖原C遺跡	尾花沢市大字延沢字袖原	縄文時代早期
18	袖原D遺跡	尾花沢市大字延沢字袖原	縄文時代後・晚期
19	袖原E遺跡	尾花沢市大字延沢字袖原	縄文時代前・後期
20	袖原F遺跡	尾花沢市大字延沢字袖原	縄文時代早期
21	細シ田A遺跡	尾花沢市大字六沢字細シ田	縄文時代
22	細シ田B遺跡	尾花沢市大字六沢字細シ田・西浦・北浦	縄文時代前期
23	ソリメA遺跡	尾花沢市大字原田字ソリメ	縄文時代早期
24	ソリメB遺跡	尾花沢市大字原田字ソリメ	縄文時代早・前期
25	ソリメC遺跡	尾花沢市大字原田字ソリメ・下水山	縄文時代
26	下北浦遺跡	尾花沢市大字原田字下北浦	中世
27	松山遺跡	尾花沢市大字延沢字松山	縄文時代中期
28	本町遺跡	尾花沢市大字延沢字本町	縄文時代前期
29	向山遺跡	尾花沢市大字延沢字荒町	縄文時代
30	尾羽沢遺跡	尾花沢市大字延沢字尾羽沢	縄文時代早・中・晚期
31	坊ノ入遺跡	尾花沢市大字延沢字坊ノ入	縄文時代晚期
32	カマツ坂遺跡	尾花沢市大字延沢字カマツ坂	縄文時代中期
33	延沢城跡	尾花沢市大字延沢字古城山・他	戦国～近世

表1 袖原3遺跡周辺の遺跡

標高をもつ尾花沢市街地の東から南東の常盤地区に伸びるなだらかな丘陵には、いくつかの遺跡が発見されている。浦山遺跡の北側に浦山北遺跡（第1図7）縄文時代中期の遺跡が立地する。また、徳良湖の湖底には徳良湖A・B遺跡が発見されているが、もともと湖底にあった遺跡ではなく、徳良湖を築堤したとき湖底に沈んでしまった遺跡である。徳良湖A遺跡は縄文時代早期（貝殻沈線文土器）・前期（織維土器）・中期・晚期の石器や土器が多数出土している。また8世紀頃の土器もまとめて出土している。

III 遺跡の概観

1 遺跡の層序

尾花沢盆地は県内でも段丘が発達した地域として知られ、米地文夫氏の分類からすると高位の段丘面から、大きく分けて猿羽根山丘陵Ⅰ面、猿羽根山丘陵Ⅱ面、長根山丘陵面、尾花沢段丘Ⅰ面、尾花沢段丘Ⅱ面、沖積面に分けられるという。猿羽根山丘陵Ⅰ面は尾花沢と舟形との境にある丘陵を代表して標高190m～230mの丘陵が発達し、猿羽根山丘陵Ⅱ面は160m～180mの丘陵が発達する。その下位に140m～180mのなだらかな長根山丘陵が形成されている。旧石器時代の遺跡の袖原3をはじめとして周囲で確認されたたといいう2・4・5・6遺跡が発見された面は、猿羽根山丘陵Ⅰ面に立地し、袖原1遺跡（袖原F遺跡）は猿羽根山丘陵Ⅱ面に、浦山遺跡は長根山丘陵面に立地していることになる。いずれも高位の段丘に位置する。しかし、いわゆる長根山丘陵といわれるこの地域の一帯を見た場合、周囲の遺跡の立地を観察すると猿羽根山丘陵Ⅱ面と長根山丘陵面には縄文時代の遺跡も多く見受けられる。尾花沢段丘Ⅰ面は、福原地区などの丹生川右岸や尾花沢市街地がのっている面が代表的な面で、尾花沢盆地の特徴的な地形面でもある。尾花沢段丘Ⅰ面の基本的な層序は、表土の直下にクロボクと呼ばれる暗黒褐色の土壤が30cm～50cmほど堆積し、さらにその下には漸移層をはさみ肘折尾花沢軽石層が厚く堆積する例が典型的な層序である。また、尾花沢段丘Ⅰ面より低い尾花沢段丘Ⅱ面には一部肘折尾花沢軽石層はのるが、二次堆積物の所産と考えられている。また、この肘折尾花沢軽石層の直上に堆積するクロボク層にもスコリアが混在することがまま見られ、しかも多くの遺物も含みその層の形成に複雑な過程があったものと考える。

袖原3遺跡を含め周囲で確認されたといいう袖原2・4・5・6遺跡の最上部には、クロボク層や肘折尾花沢軽石層が安定して堆積しているところは見られず、浸食が進んでいた丘陵であったものと考えられる。クロボクが確認できるのは調査区の西側にある畠の南側露頭面に埋まつた小さな谷の断面に観察でき、そこに僅かなクロボクの二次的な堆積と考えられる。これに対し、袖原1遺跡（袖原F遺跡）は旧石器時代の遺跡とされているが、表探された竈状石器が確かにそのものであれば縄文時代ものと酷似する。また、層序においても猿羽根山丘陵Ⅱ面若しくは長根山段丘面と考えられ、クロボク層や肘折尾花沢軽石層が安定している地形である。立地面と表探されたといいう竈状石器とこれまで採集された遺物の観察からすると縄文時代

の遺物である可能性が極めてたかい。縄文時代の遺物が採集された袖原A・B・C・D・E・F遺跡は、前述した旧石器時代の遺跡と比較すると、明らかに立地条件が異なる。それは、立地的に猿羽根山丘陵Ⅱ面より低い、わりとクロボク層や肘折尾花沢軽石層が安定した地形の上に営まれた遺跡である。袖原3遺跡の層位は、袖原遺跡調査団が作成したものを参考にして（第2図）説明する。鍵層になるものがいくつかあげられる。7層のSEISO（成層火山灰）、その直下で確認されたSK（三瓶本次火山灰：約10万年前）、14層のSD2（袖原第2軽石層）、19層のSD1（袖原第1軽石層：約30万年前）がポイントになる層である。

袖原3遺跡の土層の堆積状況を南側露頭と1・2区の土層平面図及び7区の西壁土層断面図を比較しながら見ていくと、おおむね南側から北方向に傾斜していることがわかる。

2 調査の概要

発掘調査区の設定にあたり、効率をあげるために一番留意したのは、過去に最も多くまとまつた石器群101点が出土している第1文化層から、新たな確実な石器の出土を確認するため、第1次・2次調査区に隣接する区域ができるだけ広い範囲を面的に発掘することに重点をおき必要に応じて旧発掘区の拡張、深掘区の精査をおこなう。結果的に1区～8区、深掘区を含め九ヶ所の発掘調査を実施する。

1・2区（第4図・第7図・第8図）

第1・2次調査でE-16区付近から4点の石器、B-16～19の東壁面近くからまとまつた石器が出土しており、その東脇に調査区を設定し、石器の検出と土層の観察（第7図）を実施する。便宜上、2m×14m（G-10～16）のトレンチを1区とし、8m×10m（C-H-17～20）のグリットを2区とする。第5図は表土を剥いた段階での8層～14層の面的な広がりを示したものである。1区では7層（成層）と8層の境は明確に識別できるが、2区で見ると8層～13層まで複雑に入り組み、特に11層～13層までの区別は困難である。14層はSD-2（袖原第2軽石層）なので明確にわかる。

1区～2区の狭い範囲内で8枚の層が見られることは、地形を復元した場合、北方向にかなりの勾配をもつ丘陵であったと考えられる。調査は上位の層から順に剥し精査していくが、第6図で示すように、1区から頁岩製と思われる小さな礫が1点出土し、2区からは1点の礫が出土し、半数以上が風化しほろぼろの状態である。

10層上面～12層上面まで、過去に出土した隣接区なので注意深く精査したものの、石器は全く出土しなかった。最終的に、第1次・2次調査区と1・2区の間にあるベルトもはずし精査するが、全く同じ結果であった。

3区（第4図・第9図）

第3次～5次調査でA-27～29グリットの西壁面にそうような状態で鉈状石器が出土している。層位でいえば16層上面の第2文化層と18層上面の第3文化層にあたる。この区の西側に3区（A'-27～29）を設定し精査したが、石器は出土しなかった。

4区（第4図）

第3次～5次調査で調査した区域でB・C-27～29グリットで東西に帯状に石器が出土している。層位は21層上面の第4文化層と23層上面の第6文化層にあたる。ここを4区とし10cm～20cmほど掘り下げるが、石器は出土しなかった。23層の面の広がりを見るといたるところに亀甲状のクラックが観察できた。

5区（第4図）

第1次・2次調査で調査した区域でB-23・24グリットで、石器群がブロック状で出土している。また、A'-20グリットからまとまった石器が出土しており、石器群が広がる可能性があるとみて5区を設定した。層位は16層上面で第2文化層にあたる。地表から僅か20cmほどと浅く、石器は出土しなかった。

6区（第4図）

6区は、第1次・2次調査で調査した区域と1区にはさまれた南北に細長い調査区であるが石器は出土しなかった。

7区（第4図・第10図）

発掘調査の発端となった1992年6月に露頭面から2点の石器を採集した地点の東側に7区を設定した。7層までは重機でさげ、その後は丁寧に精査しながら掘り進めるが、石器は出土しなかった。

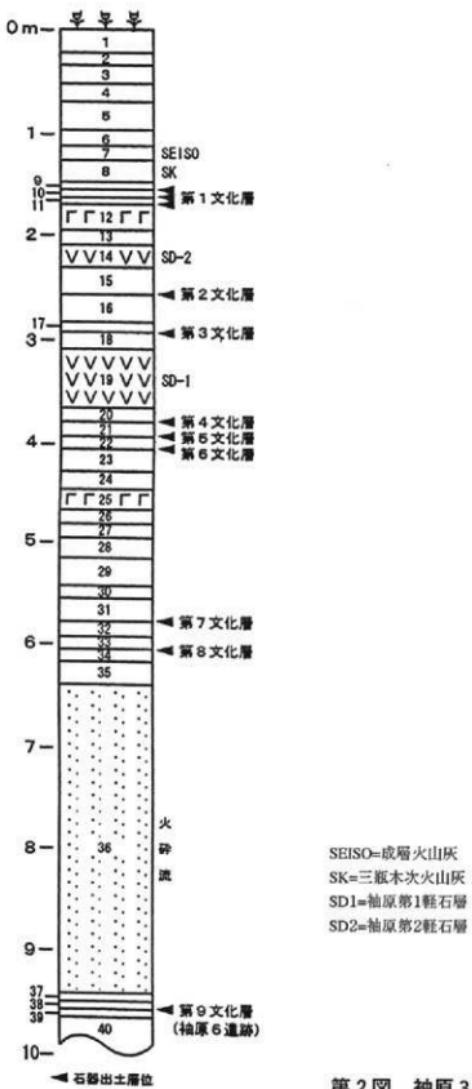
8区（第3図・第11図・第12図）

1997年に南側の露頭面で中島山遺跡出土の石器と接合した石器が出土した地点の周囲に8区を設定した。最終的に駄目押しに13層まで下げるが、石器は出土しなかった。ただし、第11図で示すように11層面で炭化物の広がりがみられたもの、この層になぜ炭化物が含まれているのかは不明である。

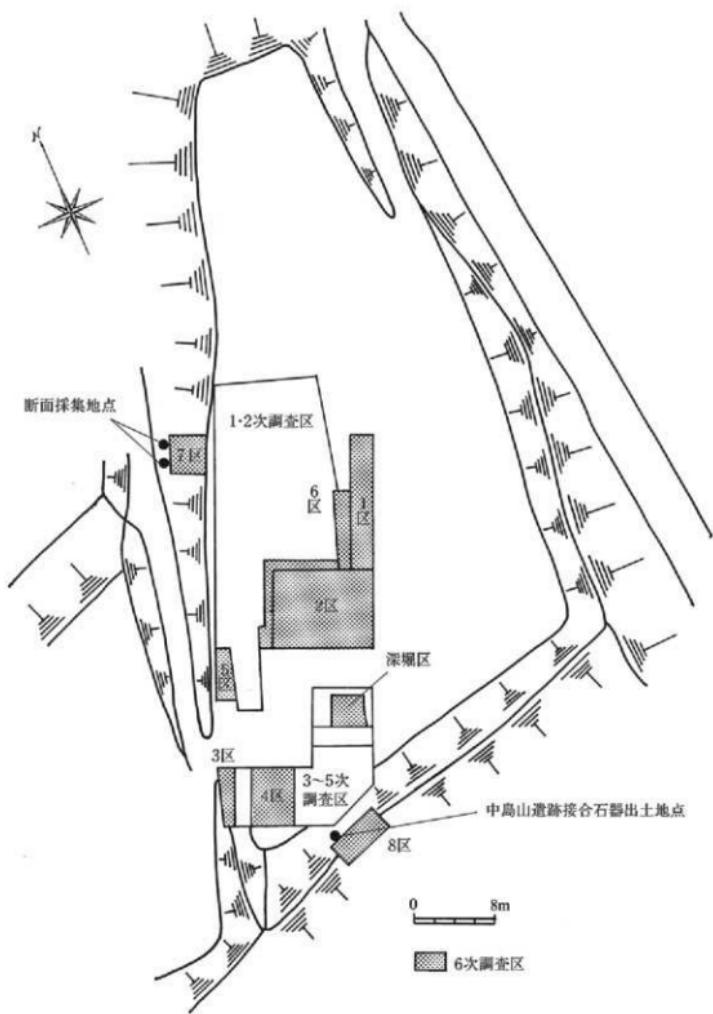
深掘区（第4図・第13図）

深掘区からは、32層上面の第7文化層からクリーバー状の石器を含む12点の石器が出土し、34層上面の第8文化層からは3点の石器が出土した。19層のSD-1（袖原第1軽石層）の年代が約30万年前火山灰と分析されたので、第7・8文化層の石器群はそれより古いことになる。この区では石器の検出というよりも土層の観察が主体となった。第13図深掘区土層断面図が示すように、縱に走るクラックが非常に目立ち複雑な層を形成している。また、23層は明らかに水性堆積物で、30層にはいわゆる腐れ疊や石英質の疊を含む。同じように32層にも多くの風化した岩片や疊を含み、砂質性をおび安定した層を形成しているようではなかった。全般的に20層以下の層は安定した層を形成しているとはいはず複雑である。

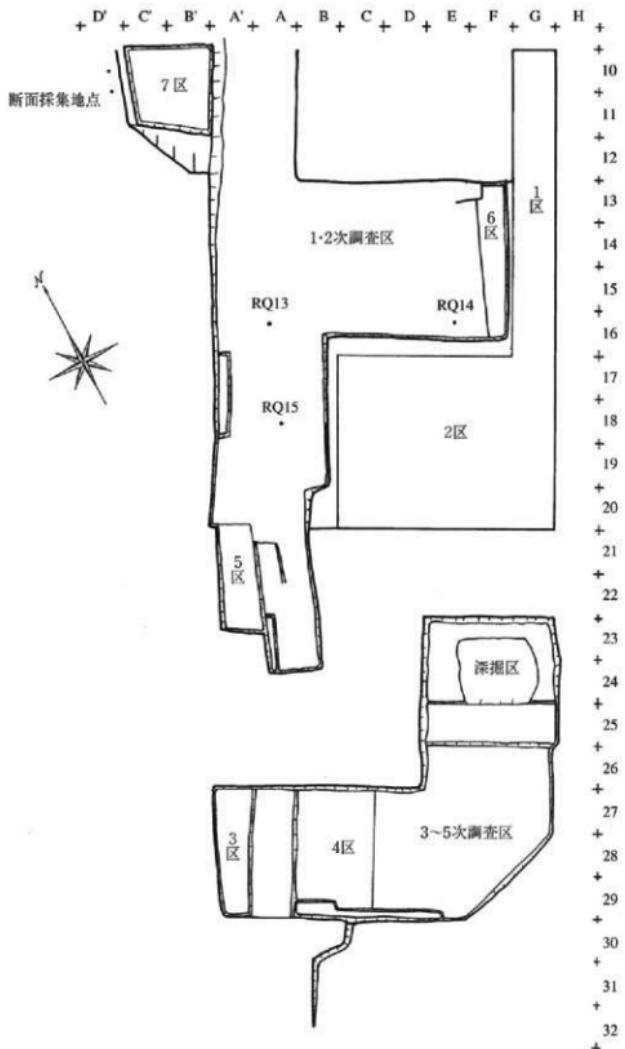
ここでも、東壁面と西壁面を観察すると北方向に傾斜していることがわかる。また、北壁面と南壁面は水平に近い。来跡した地質学等の専門家の多くは20層以下は、水性堆積である可能性が強いという見解を示された。



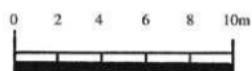
第2図 袖原3遺跡層序模式図

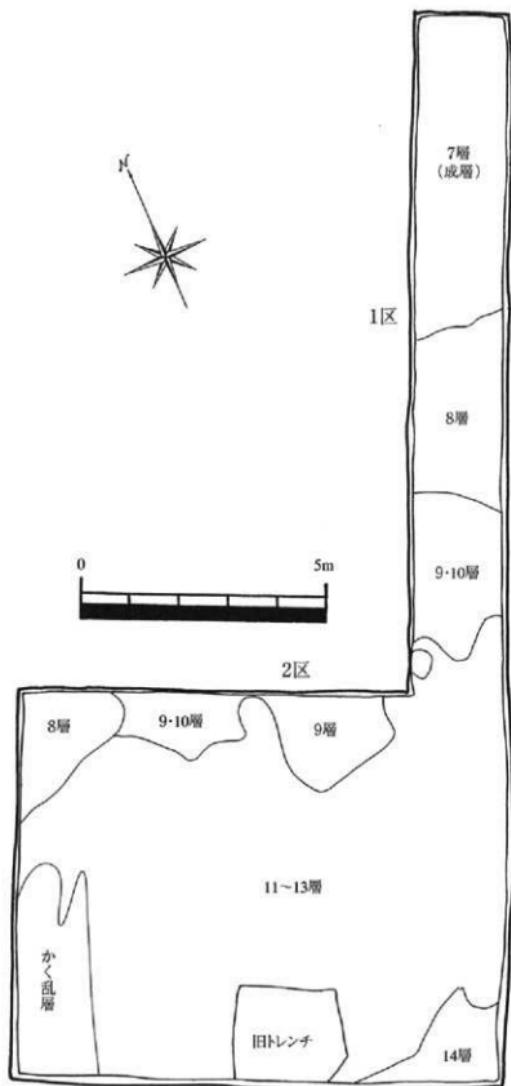


第3図 袖原3遺跡調査区設定概念図

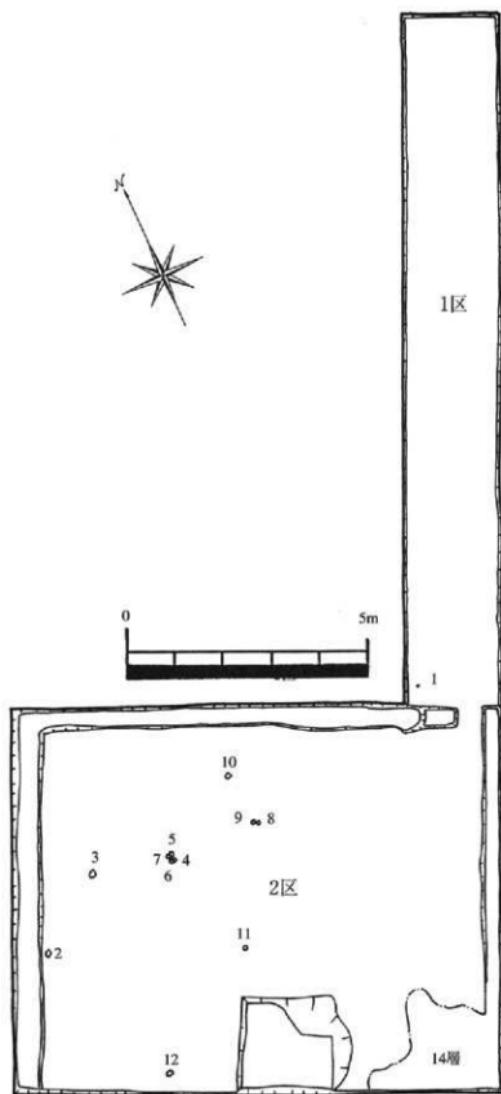


第4図 袖原3遺跡調査区設定図

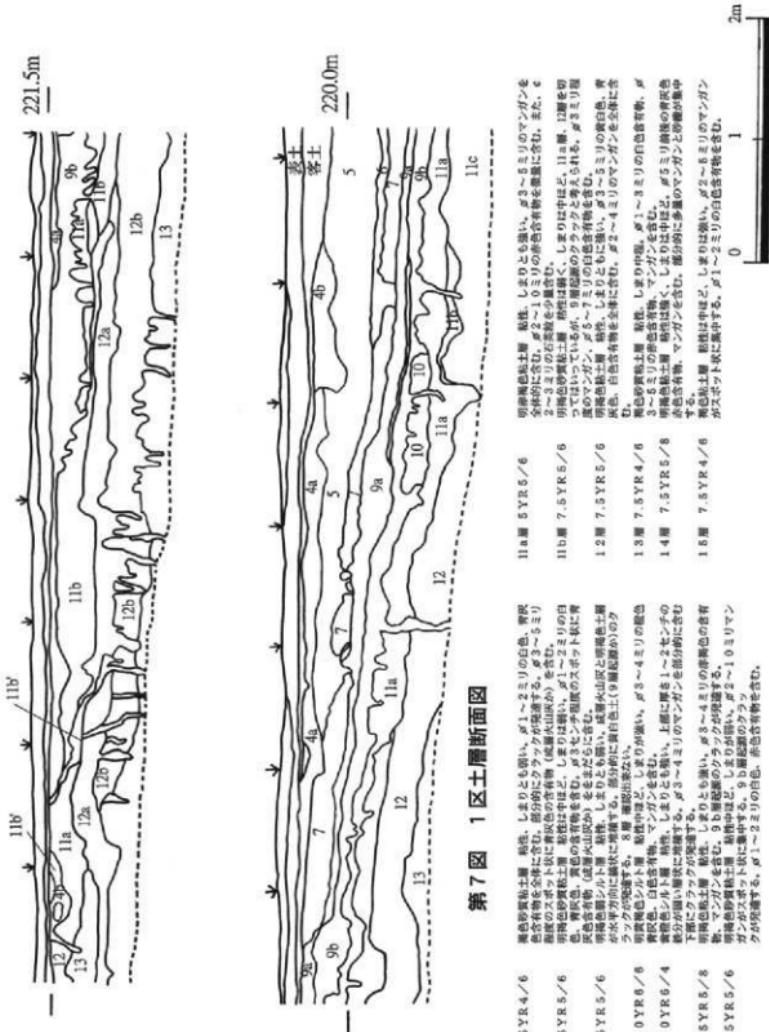




第5図 抽原3遺跡土層平面図



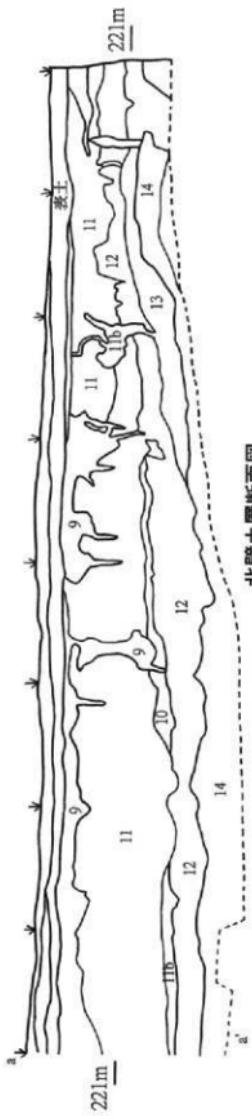
第6図 碓出土分布図



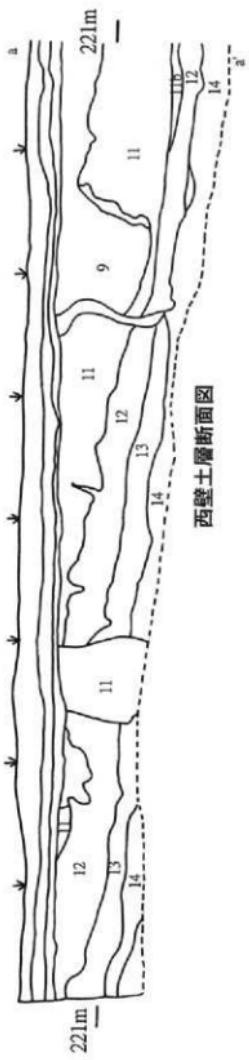
第7圖 1區土層斷面圖

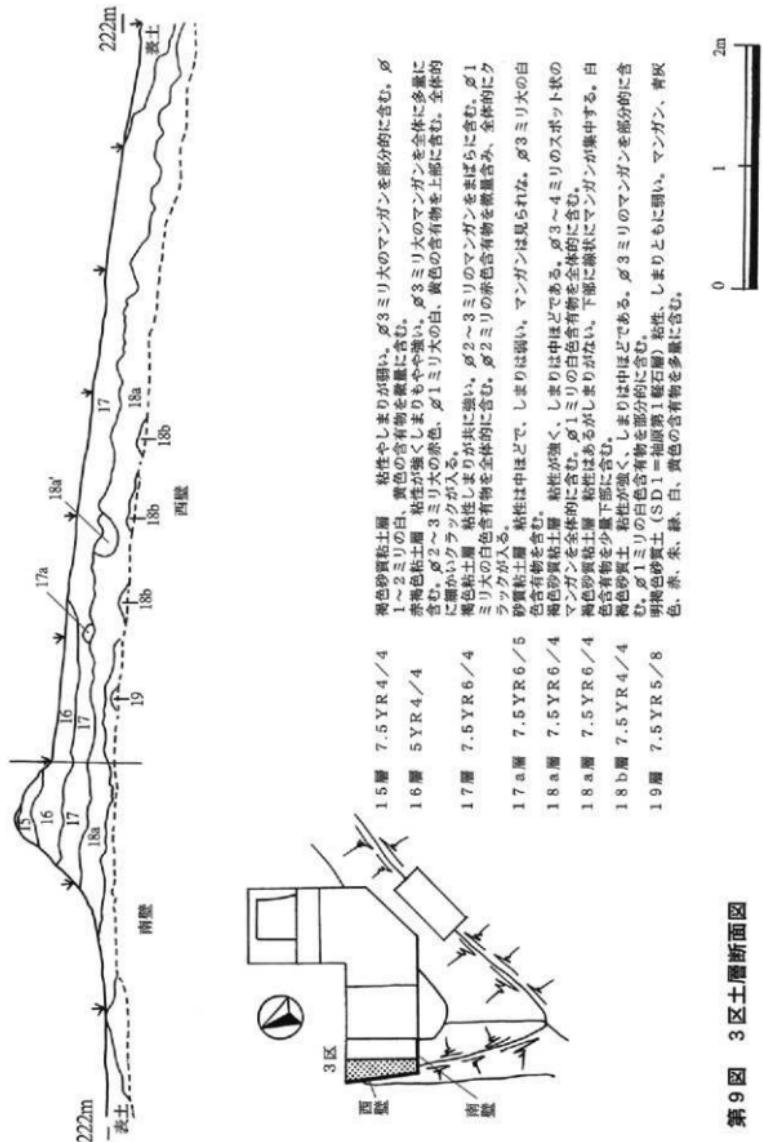
2m
1
0

第8図 2区土層断面図

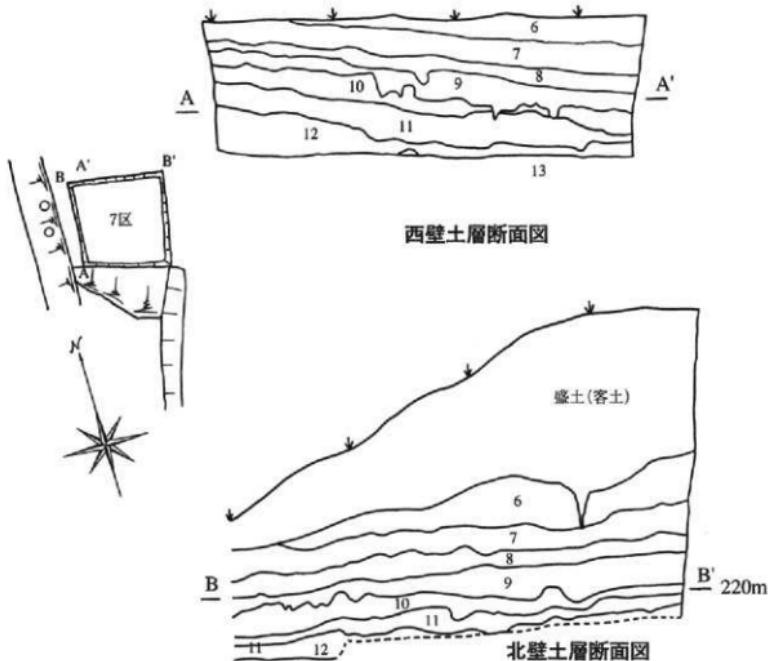


西壁土層断面図



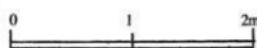


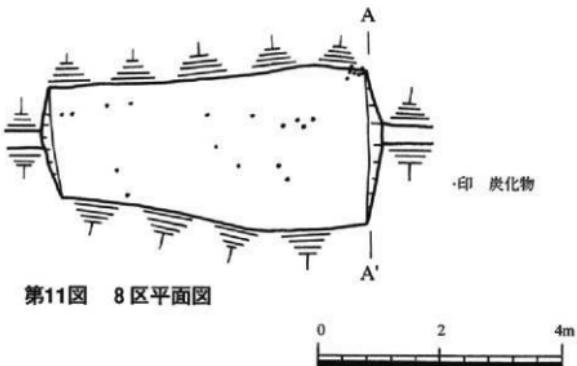
第9図 3区土層断面図



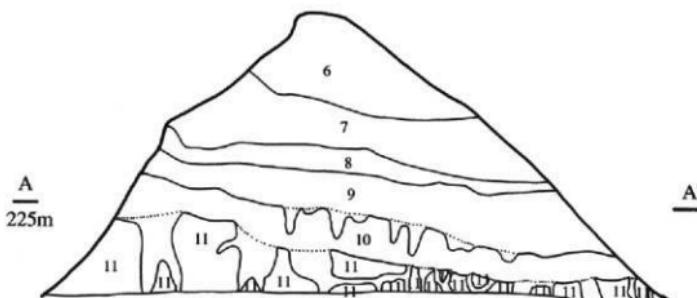
- 6層 7.5 YR 4/6 橙色砂質粘土層 粘性、しまりともに中ほど。全体的に青灰色火山灰（成層火山灰の巻き上がり）を微量に含む。含有物は少ない。
- 7層 10 YR 5/6 黄褐色砂質粘土層 粘性しまりとも弱い。全体に青色火山灰（成層火山灰）を多量に含む。部分的にφ2～5ミリのマンガンを含む。火山灰（1～1.5センチ）と粘土（5ミリ）が互層をなしているのが部分的に観察できる。
- 8層 10 YR 5/4 黄褐色粘土層 粘性、しまり共に強い。φ2～3ミリのマンガンを全体的に含む。φ1～1.5センチの灰色火山灰を上部に含む。
- 9層 10 YR 6/6 明黄色シルト質粘土層 粘性、しまり共に強い。全体にクラックが発達し1.2層まで達するものもある。φ5ミリのマンガンをまばらに含む。
- 10層 10 YR 4/6 橙色シルト質粘土層 粘性、しまり共強い。φ2～3ミリの白色含有物、マンガンを含む。9層起源のクラックが全体に入る。
- 11層 7.5 YR 5/6 明褐色粘土層 粘性は強く、しまりは中ほど。φ5～10ミリの橙色含有物を部分的に含む。φ1センチほどのマンガンがスポット状に集中する。
- 12層 7.5 YR 4/6 橙色粘土層 粘性は強く、しまりは中ほど。φ5～7ミリのマンガンを全体的にまんべんなく含む。φ5ミリほどの赤色、白色含有物を含む。
- 13層 10 YR 5/8 黄褐色粘土層 粘性は中ほどで、しまりは強い。φ3～5ミリのマンガン、黄色含有物を含む。

第10図 7区土層断面図





第11図 8区平面図



- 6層 7.5YR4/6 棕褐色シルト質粘土層 粘性は弱く、しまりが強い。φ1ミリの青灰色、白色、黒色の風化岩片を微量にまんべんなく含む。
- 7層 10YR4/6 棕褐色シルト層 粘性はやや弱く、しまりは強い。φ1ミリの青灰色、白色、黒色の風化岩片を多量に含む。下部に青灰色が入る。炭化物やマンガンを微量に含む。
- 8層 7.5YR4/4 棕褐色シルト質粘土層 粘性は中ほどで、しまりはやや強い。一部に7.5YR5/8の粘性が弱く、しまりが中ほどの明褐色土が入る。
- 9層 10YR5/4 法褐色粘土層 粘性は中ほどで、しまりは強い石英を微量に含み、クラックが下部に入り10層に達する。
- 10層 5YR4/8 赤褐色粘土層 粘性、しまりとも強い。下半部に褐鉄が入る。
- 11層 5YR3/6 暗赤褐色シルト質粘土 φ1~5ミリの赤、白、黄色の風化岩片を少量含む。マンガンも含む。



3 捺造痕跡

第1次・2次調査の旧発掘面から3点の不自然な状態の石器が発見された。それについて記す。石器の発見順序を石器番号としたが、石器を発掘する順序が石器番号の順序でないのと、ここでは、調査の経過上発掘した順で記す。

2: RQ14 (第15図) 頁岩製の剥片で12層上面で確認した。主要剥離面を上にした状態で出土する。第1次・2次調査で埋められた客土を重機で剥いださい、石器を引っかけてしまったので動いてしまう。しかし、石器の型がはっきりと残っていたので現位置を復元することができた。石器が動いているせいもあって、石器の周りの土の観察はできなかつた。動いている土を除いていくと、重機で引っかけられマンガン粒や砂の動きから、ものの位置を復元することができた。その位置に戻すと石器の下に大きな隙間があり、しかも先端が円錐状になる小形の移植ゴテのようなもので突き刺した痕を確認することができた。また、移植ゴテによるマンガンの動きが明瞭に観察でき、マンガンの動きから西側から掘り込まれたものとわかった。石器の背面には土の付着がなくきれいな状態であった。泥や泥の薄い膜、こぼれ土、植物の細い根も見られ、人為的に埋め込まれた証拠が明らかであった。

1: RQ13 (第14図) 頁岩製の剥片で10層上面で確認した。主要剥離面を上にした状態で出土した。石器の発見時の7月6日は全く周囲の土壤との相違を観察することができなかつた。7日に佐川正敏、菊地強一、柳田俊雄、山田晃弘4氏が立会のもとに、土を取り除いていくと、やはり周囲の土壤との相違は明確ではなく、石器の北側を覆っている土壤が10層から自然の状態で続いているため、判断に困難を極めた。しかし、霧吹きで石器とその周囲を濡らすと石器と土壤の間に隙間があり、水が素早く浸透していくことがわかつた。また、南側の打面付近の隙間から植物の根が出ていたのが明瞭に観察でき、人為的に埋め込まれた可能性を示唆した。9日検討委員長の戸沢充則氏、特別委員会第2作業部会長の白石浩之氏の立会のもとに、石器の周囲を精査したところ、四方に隙間や植物の根が観察でき、やはり人為的に埋め込まれたものと判断し石器をとりあげた。2と同様一部を除いて土の付着がなくきれいであった。インプリントではなく、直下には空間と泥の塊や植物の根が詰まつた状態であった。土を取り除いていくと、工作面から剥がれるように取れた。小さな移植ゴテのようなもので東側から4回ほど掘り込んでる面が明確に見られ、1の石器の場合も人為的に埋め込まれたことが歴然とした。

3: RQ15 (第16図) 流紋岩の剥片で12層上面で確認した。背面を上にして出土し発見時は鉈状石器かと考えられるほどであった。石器の存在が確認されるまで土色の変化や土質の相違を認識できなかつた。また、発見時でもすぐ判別できるほどの不自然さもなかつた。しかし、石器の周囲の土がほそほそして柔らかい感触をうけてはいた。

1と同様、7日佐川正敏副委員長、菊地強一、柳田俊雄、山田晃弘の4氏が立会い、菊地強一氏の指導のもとで、3の石器のそばにあった本来自然に含まれている礫の産状と比較しながら、12層中にみられるサンクラックが疊に達していること、酸化鉄の膜が疊を覆っている

こと、霧吹きで噴霧すると浸透圧が一定であることを確認した。そのうえで石器周辺の精査を行った。周囲を掘り下げ石器の輪郭がつかめたところで霧吹きで噴霧したところ、石器の周囲に限って、水が素早く浸透していくのが観察できた。また、サンクトラックを追いかけると浸透圧の早いところで切れていることも明瞭に観察でき、明らかにこの石器も人為的に埋め込まれたものと判断できた。

石器を取り上げたところ、石器の直下に大きな空間があり、薄い泥の膜、土の塊、植物の根が確認できた。2と同様、土を除いていくと工作面から剥がれるように取れ、西側から2回以上の大形の移植ゴテのようなもので突き刺した痕と、それに伴うマンガン粒の流れが明確に確認できた。石器を取り上げたさいインプリントはなく主要剥離面側に土の付着はなかった。以上3点の石器は明らかに人為的に埋め込まれたもので、自然の状態で埋もれていたものではないことがわかった。

このことは、第1次・2次調査が実施された1993・94年まで捏造がさかのばる可能性がでてきたことになる。さらに、1992年の発見時まで疑問視された。

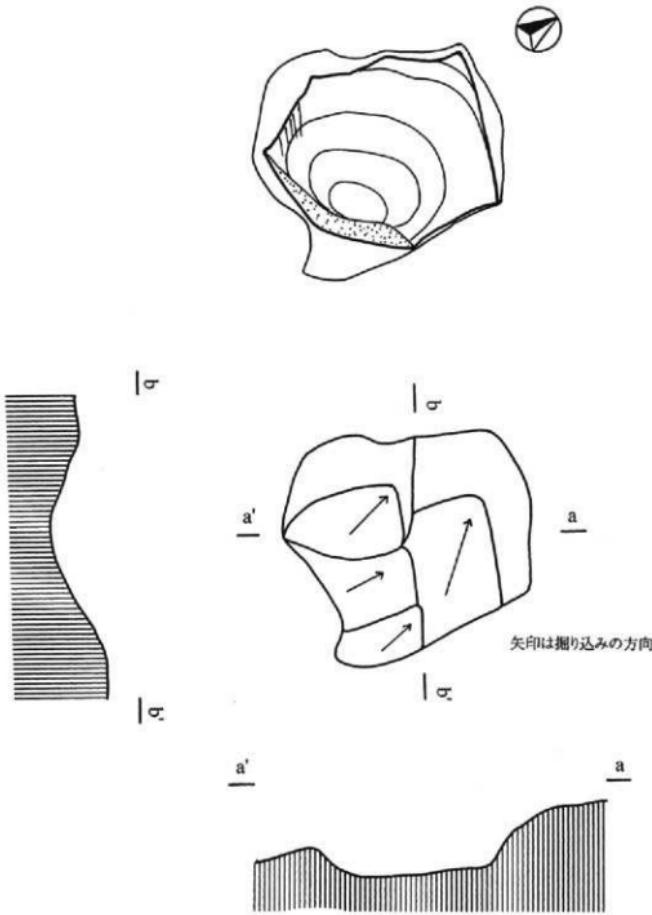
(この項の執筆にあたり、『第15回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』の袖原3遺跡の同調査員であった渋谷孝雄氏らの稿である「捏造の手口と再発防止策」を参考及び一部引用させていただいた。)

4 出土石器（巻頭図版8：第17図）

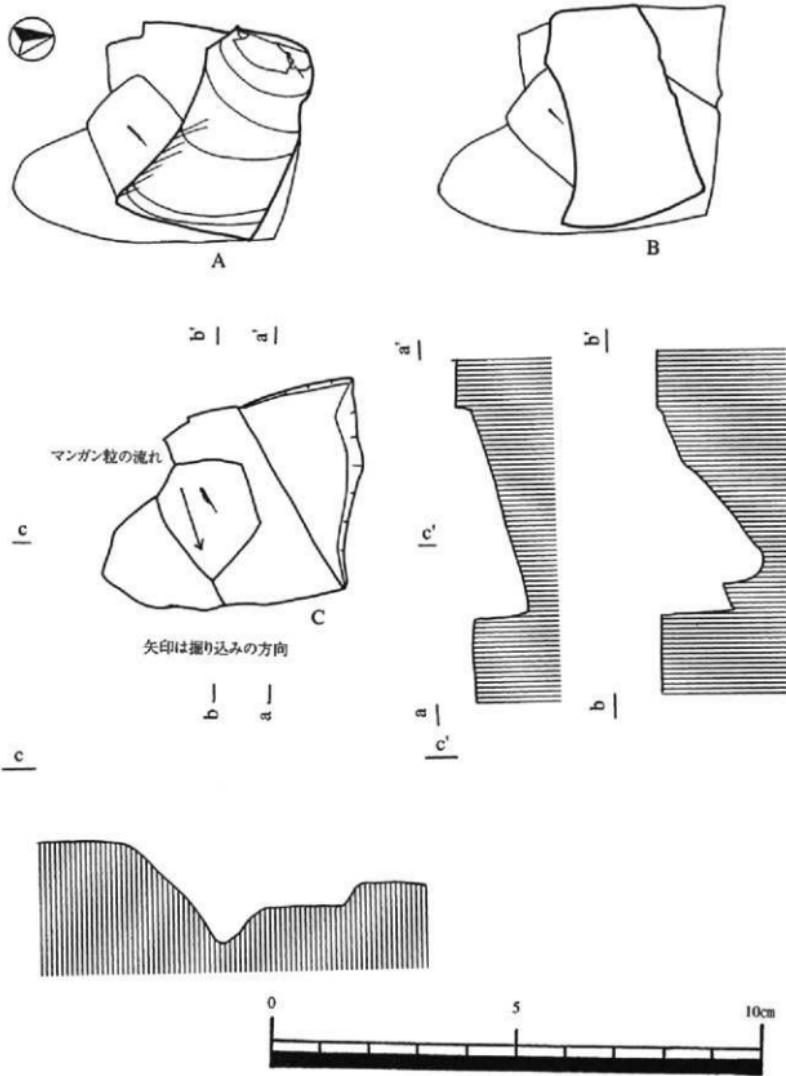
1 : RQ13は頁岩製の剥片である。長さ3, 5cm、幅4, 6cm、厚さ1, 3cmを測る。周囲に刃こぼれのような痕跡が見られるが、二次加工はない。打面は自然面である。主要剥離面側（腹面）は汚れは見られないが、背面側には褐鉄の付着が見られ、剥離面の稜線に傷がついているところが多く、しかもこの傷は新しい。石器の出土状況を見ると主要剥離面側を上にして出土しているので、下をむいて出土した背面にある傷は明らかに不自然である。

2 : RQ14は頁岩製の剥片である。長さ4, 5cm、幅3, 9cm、厚さ0, 8cmを測る。何ら加工された痕跡はない。打面は自然面もしくは節理面と考えられる。1や3に見られるような褐鉄の付着はなく、いたってきれいな剥片である。

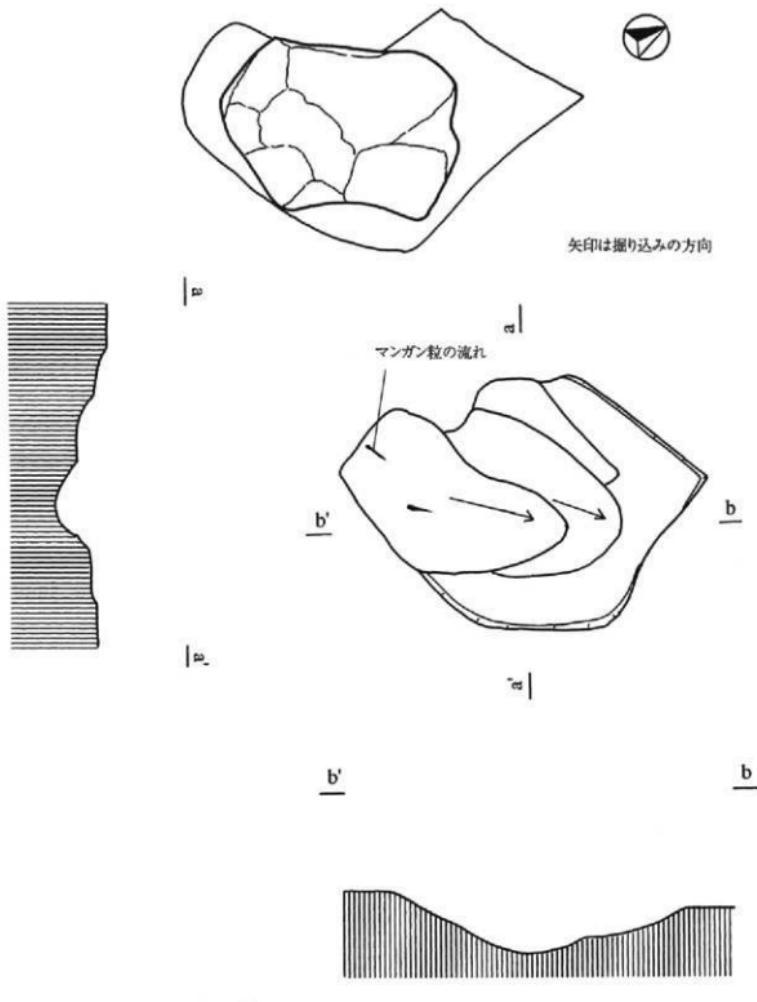
3 : RQ15は流紋岩製の剥片である。長さ5, 0cm、幅4, 3cm、厚さ1, 6cmを測る。二次加工はない。主要剥離面側に点状に褐鉄が部分的に観察できる。ガジリらしき面が二ヶ所にみられる。発見状況を考えた場合、背面を上にしながらも、打面部分にぶつかり石器を発見しており、それ以降はタケベラと長楊枝を使って発掘しているので埋まっている剥片の先端面にガジリがあるのは不自然である。また、背面に帯状の褐鉄の付着が認められる。



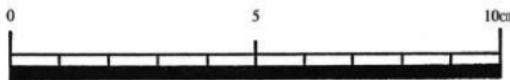
第14図 石器 RQ13 出土状況図

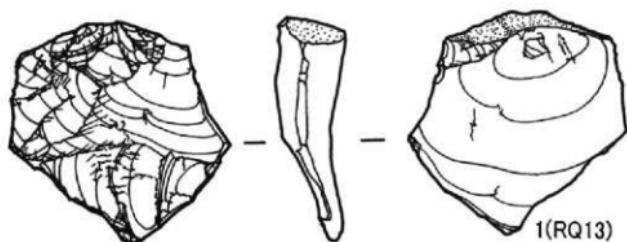


第15図 石器 RQ14 出土状況図

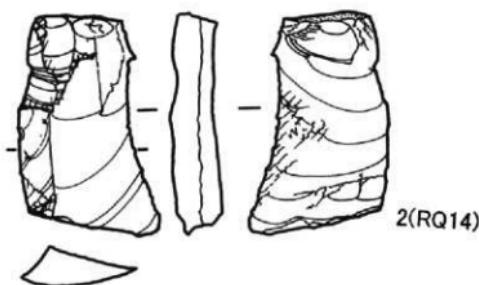


第16図 石器 RQ15 出土状況図

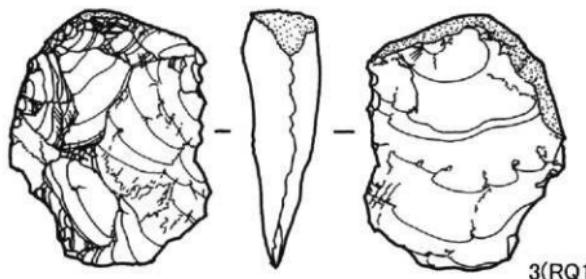




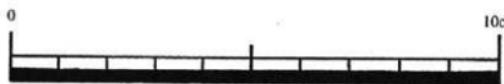
1(RQ13)



2(RQ14)



3(RQ15)



第17図 石器実測図（実物大）

IV まとめ

最初に、7月21日現場での発掘調査が終了し、2001年7月24日に袖原3遺跡検討委員会を開催したが、そこでの総括見解を示す。

1. 袖原3遺跡に対する今回の調査は6月11日から開始し、当初の予定を繰り上げて7月21日に現場での調査を終了した。

2. 発掘は、過去に最も多くまとった石器群を出土している第1文化層から、新たに確実な石器の出土を確認するため、旧発掘区に隣接する区域をできるだけ広い面積を、面的に発掘することを重点目標として行った。その他に、深掘区の断面調査や旧発掘区の一部拡張調査なども含めて、第2文化層以下のより深い文化層の調査も実施した。

3. その結果、1992年の断面採集の石器以降、第1文化層についても、それ以外の古い文化層についても、これまでの発掘で得られたとされる前期・中期旧石器文化の存在を確実に証明する、なんら新しい証拠を得ることはできなかった。

4. それのみならず、1993・94年発掘区（第1次・2次調査）の検証再発掘の結果、当時掘り残したと思われる10層・12層中から、偶然3点の石器が発見されたが、それらはいずれも作為に埋め込まれた不自然な状態、つまり「発掘捏造」の事実を認めざるを得ない。

5. なお、第1文化層に関しては、約30kmはなれた宮城県色麻町の中島山遺跡との接合関係で知られる資料があるが、袖原3遺跡における第1文化層の存在そのものが疑わしい以上、接合資料の存在自体疑わしいといわざるを得ない。

6. また、今回の調査を通じて、遺跡下部の石器包含層について、明らかに崖錐状堆積物、水性堆積の状況を示しており、生活立地を用意する環境とはなり得ない土層が多くみられ、下部の前期旧石器文化の存在も疑問視される。

7. 袖原3遺跡の今までの出土石器全点についても、6月30日に日本考古学協会の特別委員会メンバーなど約20名が集中的に観察したが、その結果、鉄分付着、ガジリ、傷など、疑問点を残す資料が非常に多いという指摘が改めて行われた。

8. 以上の調査結果を踏まえ、まだ後に2、3の検討事項を残すということを考慮しても、残念ながら袖原3遺跡を、当面旧石器時代前期・中期の代表的遺跡として、学術的に評価することは困難であるといわざるを得ない。

以上の通りであるが、大筋で発掘調査の結果としてとらえて差し支えのない見解である。

繰り返しになるが、改めて調査の結果をまとめると次のとおりである。

1) 調査区を1~8区に設定し、第1文化層主として第2文化層や第3文化層の石器群の発見

を目指し発掘調査を実施したが、なんら確実な石器が出土することはなかった。また、深掘区については土層観察の結果、S D - 1 (袖原第1軽石層)以下の層は水性堆積物の可能性が極めて高いことから、第4文化層～第8文化層の存在自体が疑わしい。

2) 旧発掘区(第1次・2次調査区)を精査したところ、明らかに人為的に埋め込まれた3点の石器が出土した。それらのうち2点は表面に褐鉄、ガジリ、傷がみられ非常に不自然で、どこからもち込んで埋め込んだことを裏付ける証拠となった。また、残りの1点も明らかに埋め込まれた石器であるが、表面に褐鉄、ガジリ、傷が全くみられない非常にきれいな剥片である。このことから、たとえば発掘資料や傷等のない石器を埋め込んだ可能性が高いと考えられる。もっと突っ込んだ話をすれば、前期旧石器とはどんな石器群をなすのかは別として、今まで発掘された209点の石器のなかに、たとえ本物の石器が存在したとしても、それなりのきれいな石器を埋め込んだ場合、それを識別するのは非常に困難である。

3) 3点の石器の捏造痕跡は、袖原3遺跡では少なくとも二通りの埋め込みの痕跡が判別できた。一つは、剥片R Q 1 3のように、移植ゴテのような道具で発掘面に斜めに差し込み上に押し上げ、その隙間に石器を差し込みそのまま土を戻すという方法と、剥片R Q 1 5のように、完全な穴を掘り込み、そこに石器を埋め込んで土を戻す方法である。

4) 7月21日に袖原3遺跡の発掘調査が終了してから、戸沢充則氏は藤村氏と7月25日、9月13日、9月26日の3回にわたり接見し、袖原3遺跡の発掘調査の結果を伝えた。その結果山形県の袖原3遺跡、福島県の原セ笠張遺跡、一斗内松葉山遺跡の3ヶ所は捏造を全部やったと認め、他3ヶ所の遺跡も捏造したと告白した。告白を事実と決めつけることは多くの危険が伴うものの、多くの研究者や自治体が驚愕した。しかし、見方を考えれば、藤村氏に対し袖原3遺跡発掘調査の事実を突きつけたことが、この告白につながったといつても過言ではなかろう。

尾花沢市としてはこれまで袖原遺跡調査團に対し、発掘調査機材の貸し出し、宿泊所の便宜重機等の借上等後方から支援してきた。そこには、袖原3遺跡を市民の歴史文化遺産として認識し、誇りと夢と希望をはぐくむものと大きな期待感があったことは否めない。しかし、発掘調査の結果、袖原3遺跡を遺跡として認識できる証明はできなかった。むしろ遺跡として認識するには困難な事実が次々と明らかになった。今後、一つの教訓として、事実は事実として、また、今回の調査は歴史的な発掘調査であったことを深く心に刻み、尾花沢に残された多くの歴史文化遺産を見直し、後世に伝えていくことが我々に課せられた責務ではなかろうか。

参考・引用文献

- 町田 洋・新井房夫 1992年『火山灰アトラス』東京大学出版会
- 梶原 洋 1996年「山形県における前期・中期旧石器時代の現状」『第10回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』
- 梶原 洋 藤村新一 鎌田俊昭 横山裕平 1997年「袖原3遺跡」『第11回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』
- 木村英明 1997年『シベリアの旧石器文化』北海道大学図書刊行会
- 梶原 洋 藤村新一 鎌田俊昭 横山裕平 相澤正信 1998年「中島山遺跡の第1次調査成果」『第12回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』
- 東北旧石器文化研究所 2000年「袖原3遺跡」『第14回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』
- 大類 誠 2001年「袖原3遺跡発掘調査」『第15回東北日本の旧石器文を語る会 予稿集』

図 版

図版 1



袖原 3 遺跡遠景（南から）

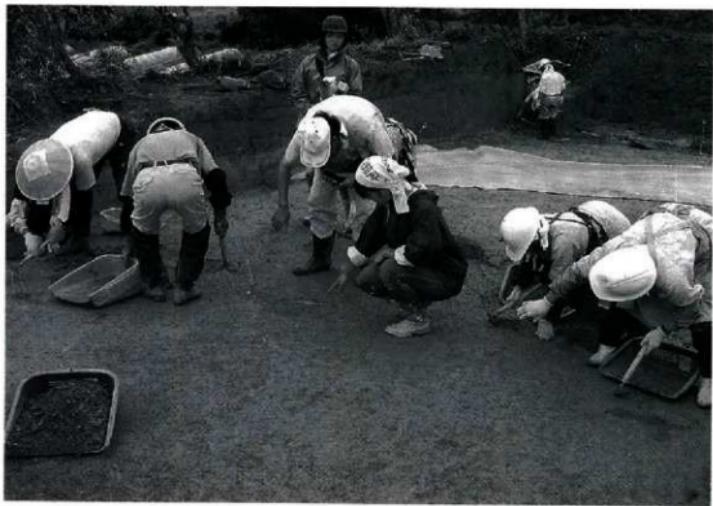


清掃風景

図版 2

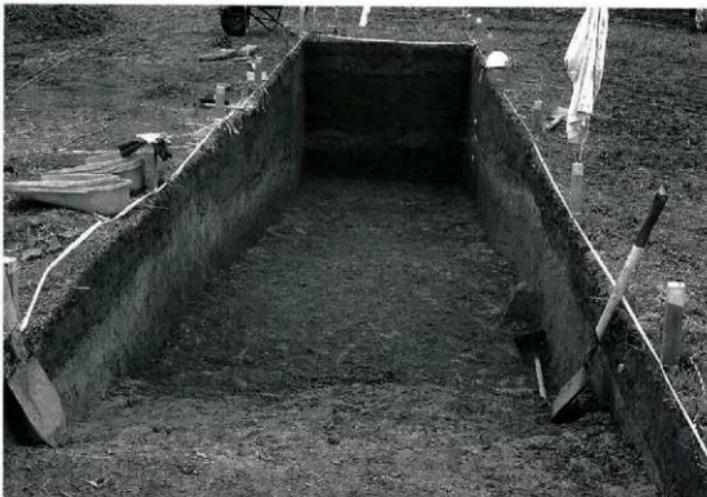


発掘風景（南から）



発掘風景（RQ13付近）

図版 3

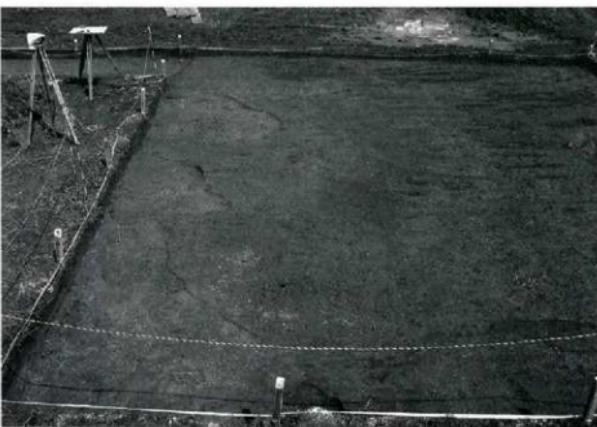


1区（南から）



2区（東から）

図版 4



2区土層の広がり



2区土層の広がり

図版5



3区（北より）

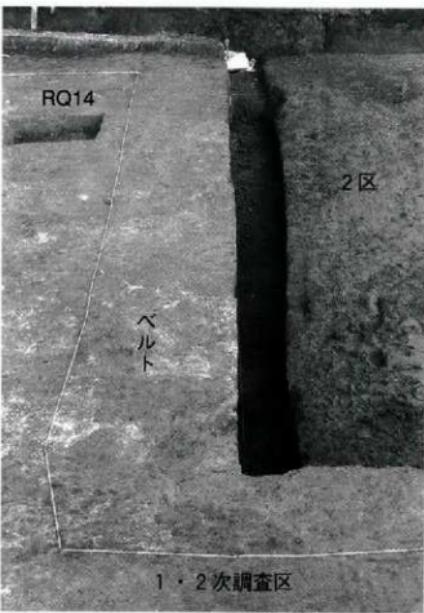


4区（北より）

図版 6

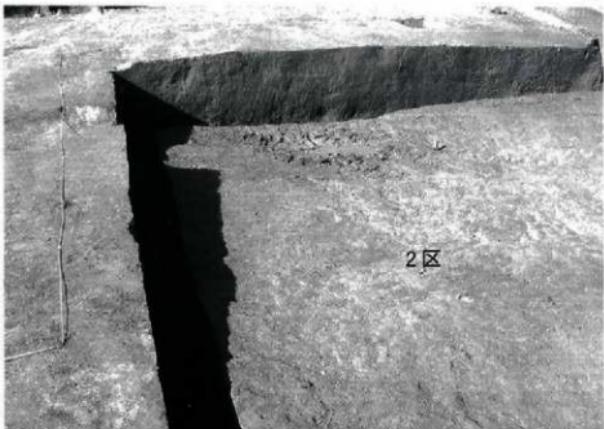


ベルトの精査（西より）

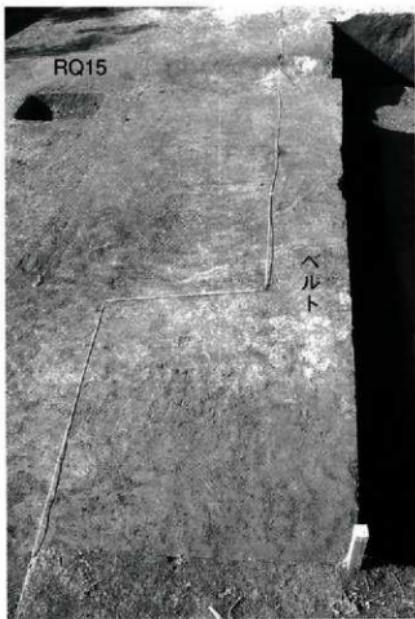


ベルトの完振状況（西より）

図版 7



ベルトの完掘状況（南より）

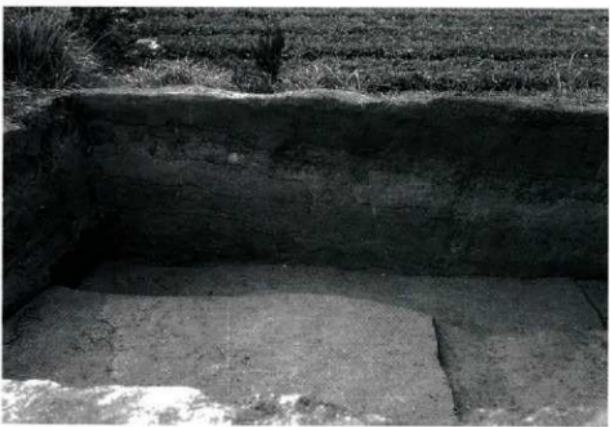


ベルトの完掘状況
(南より)

図版 8



7区南壁土層断面



7区西壁土層断面

図版 9



8区完掘状況（東より）



8区炭化物分布状況

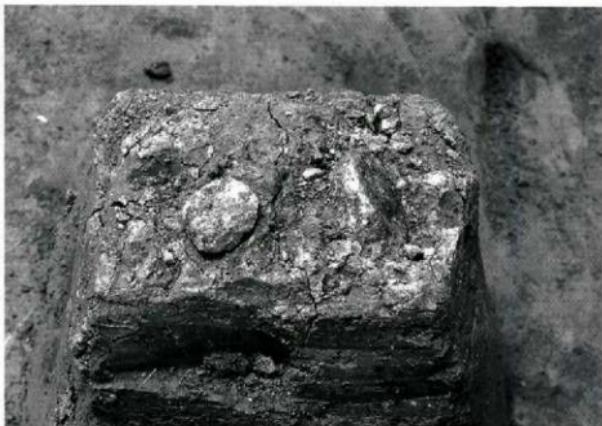


7区土層剥ぎ取り



深掘区土層剥ぎ取り

図版 11



2区 S 8・9の出土状況



2区 S 8・9のインプレント

図版 12

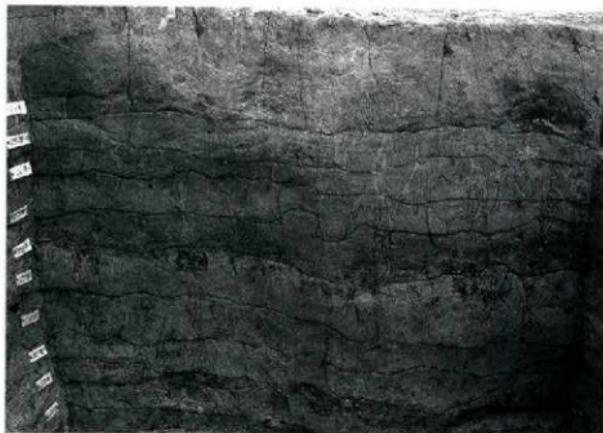


深掘区東壁土層断面



深掘区北壁土層断面

图版 13



深掘区南壁土层断面

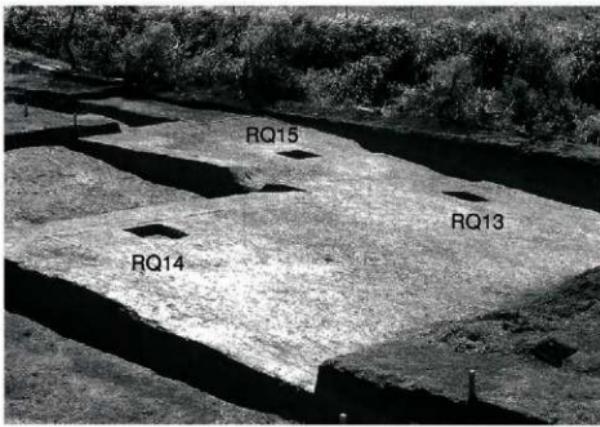


深掘区西壁土层断面

図版 14

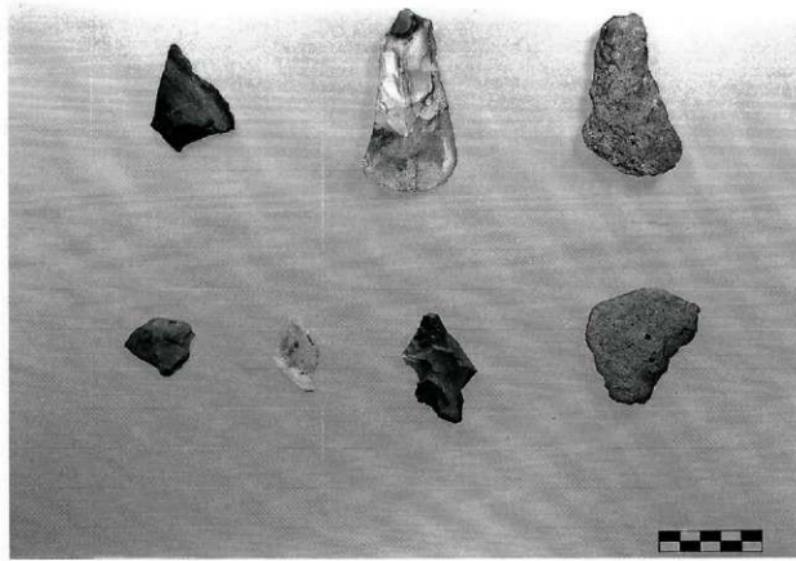
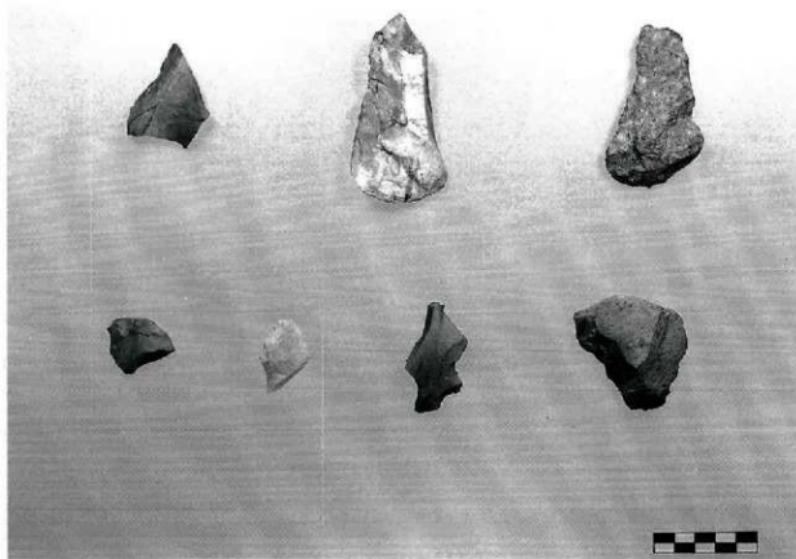


調査区全景（北東から）



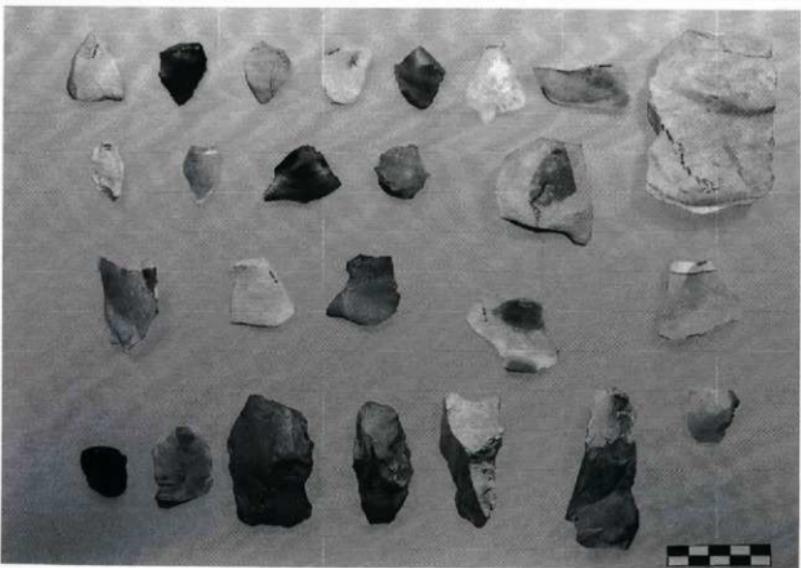
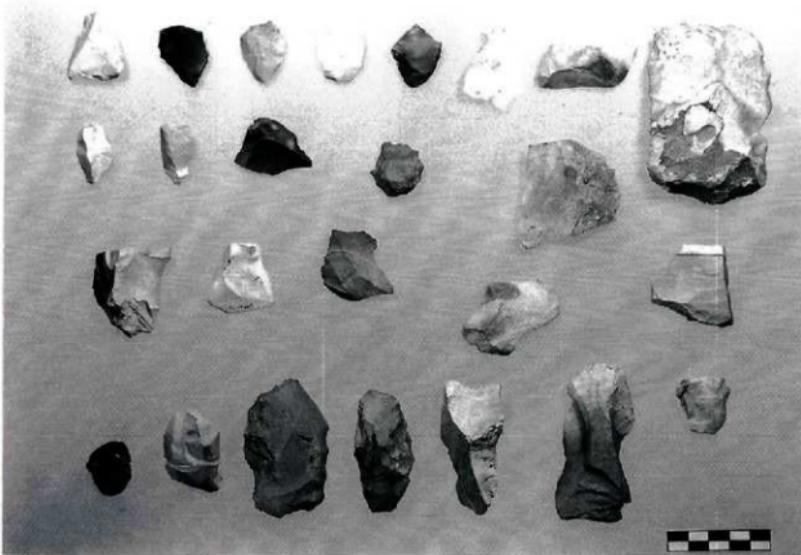
調査区全景（北東から）

図版 15



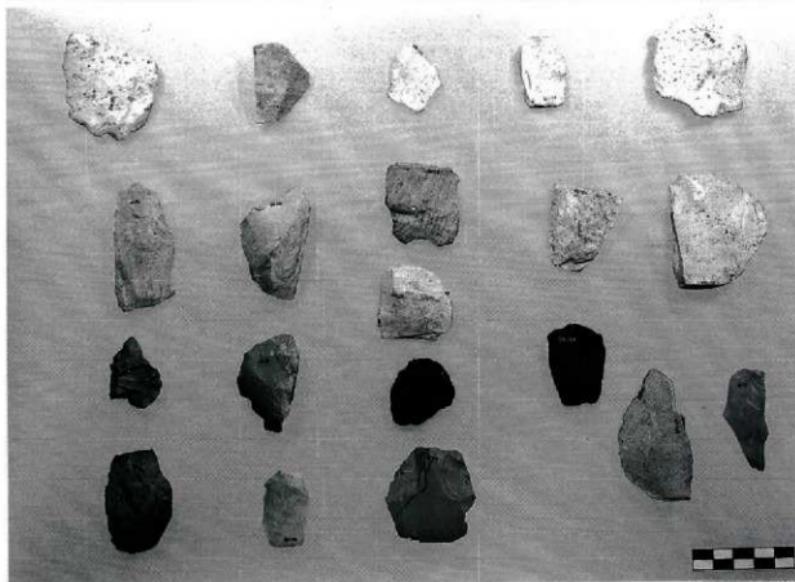
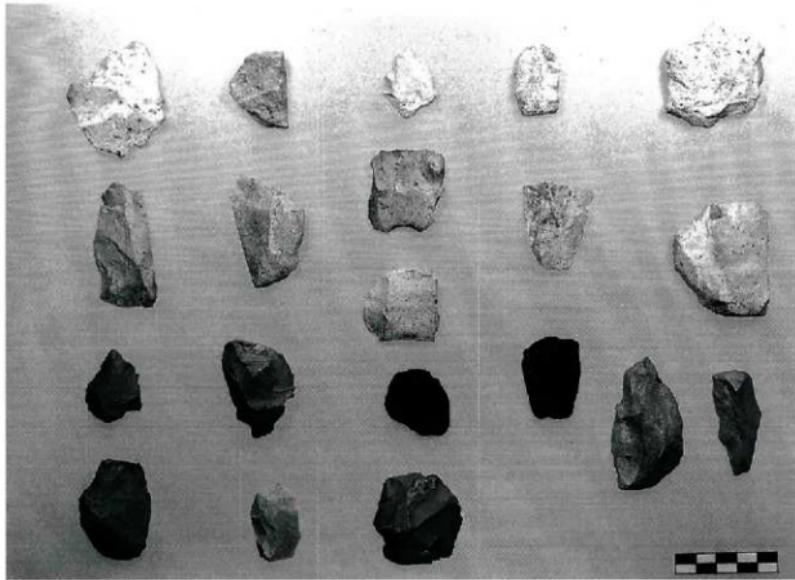
第1文化層出土石器（12層上面）

図版 16



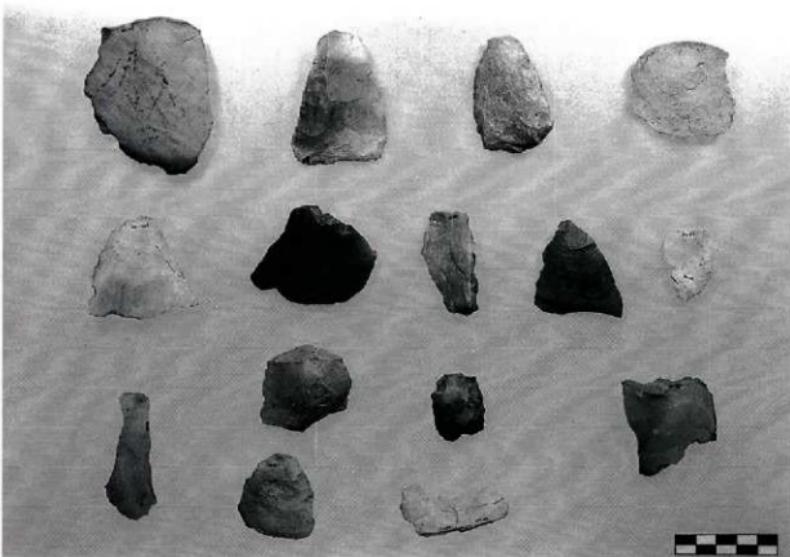
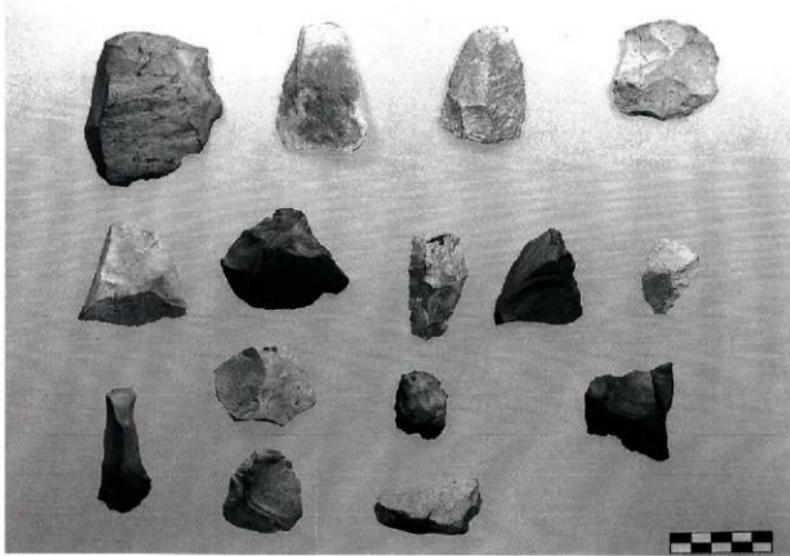
第1文化層出土石器（12層上面）

図版 17



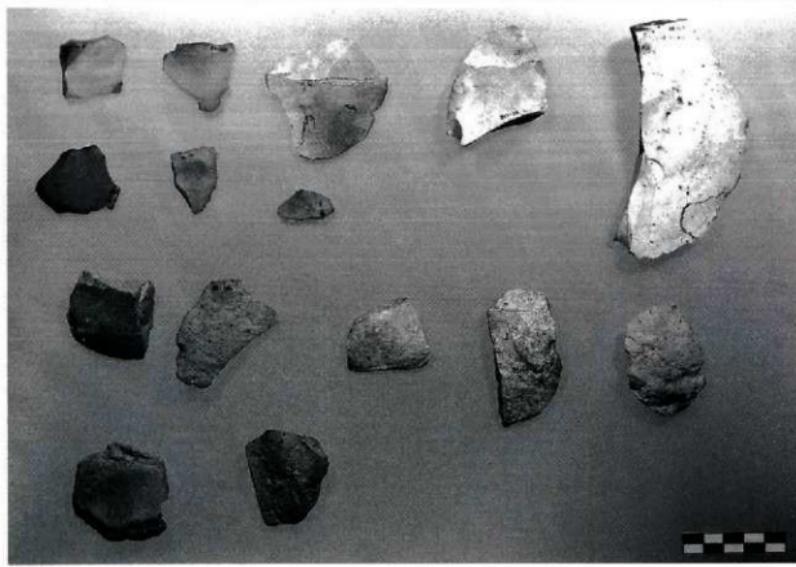
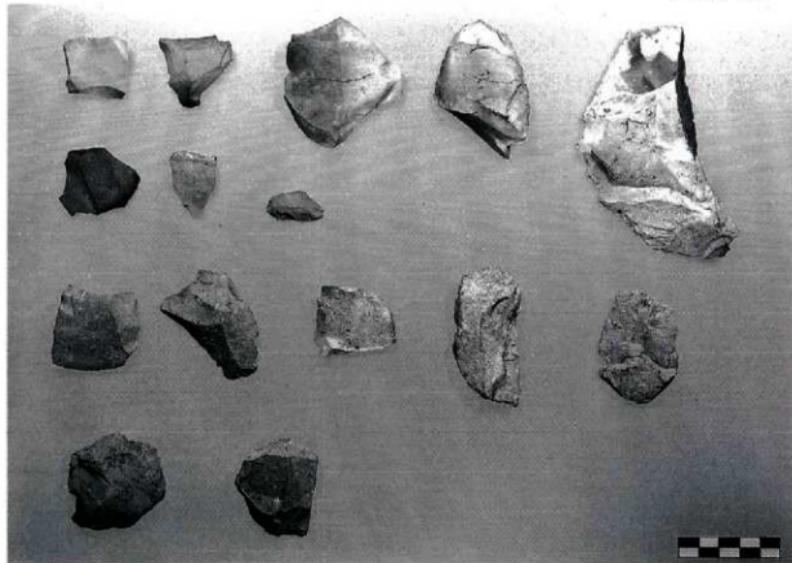
第1文化層出土石器（12層上面）

図版 18

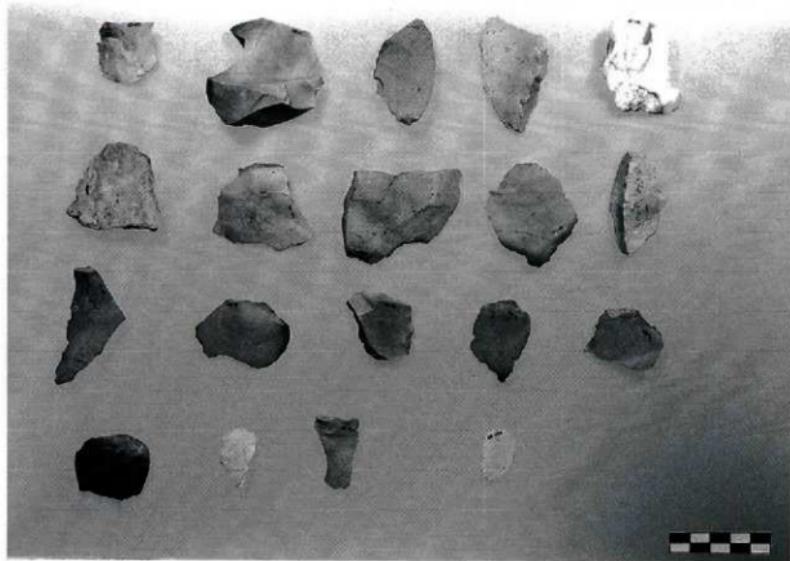
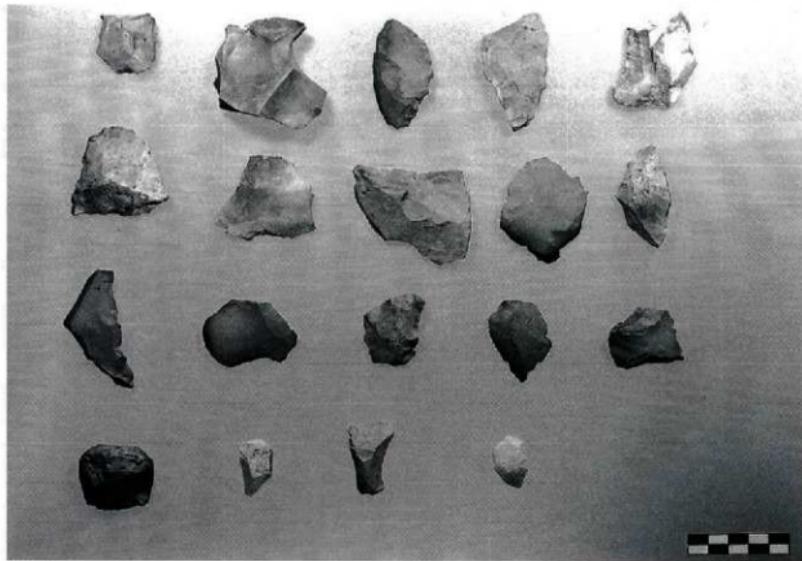


第1文化層出土石器（12層上面）

図版 19



第 1 文化層出土石器（12 層上面）



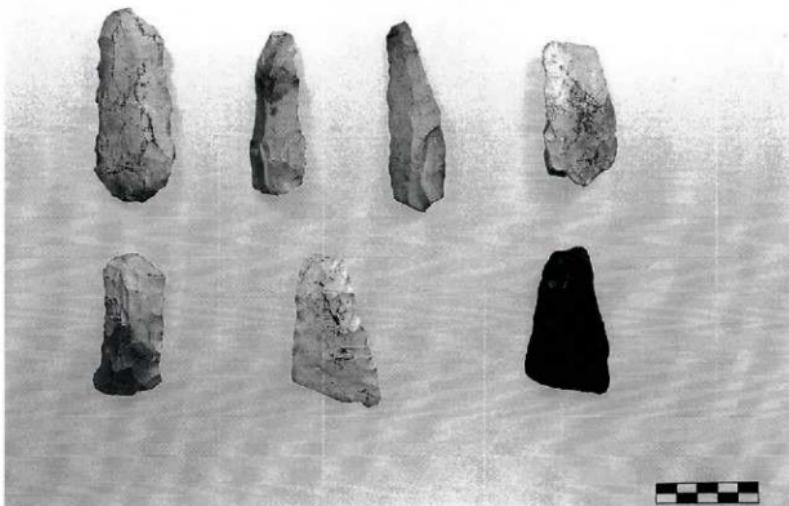
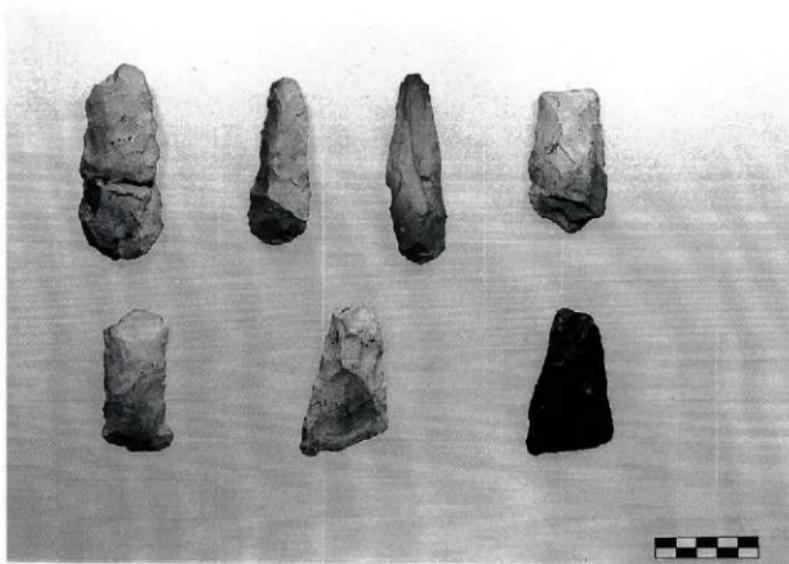
第1文化層出土石器（12層上面）

図版 21



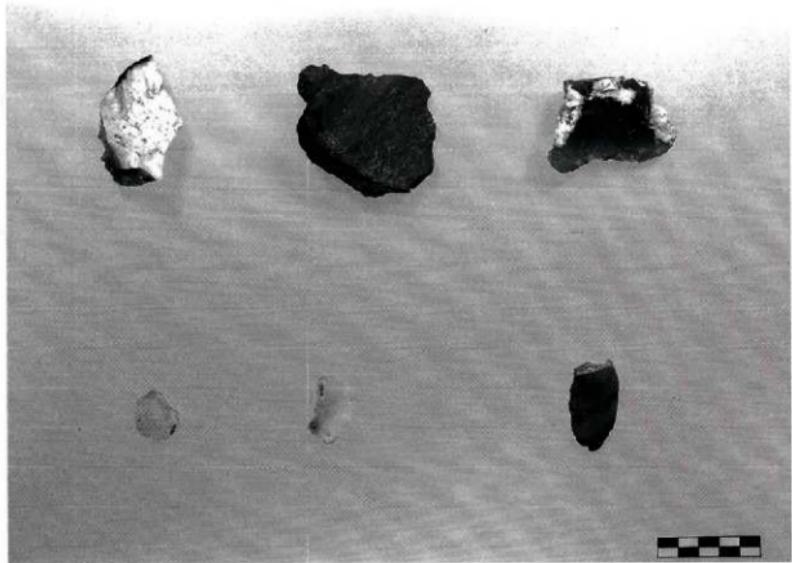
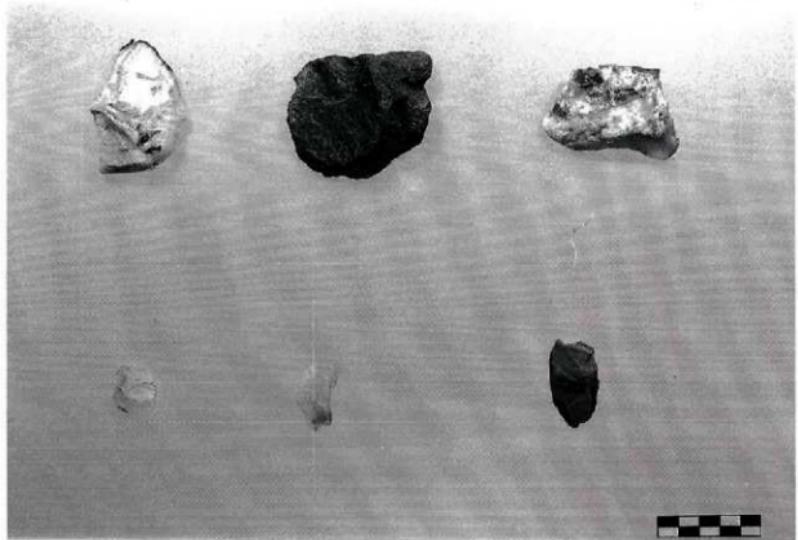
第 2 文化層出土石器（16 層上面）

図版 22

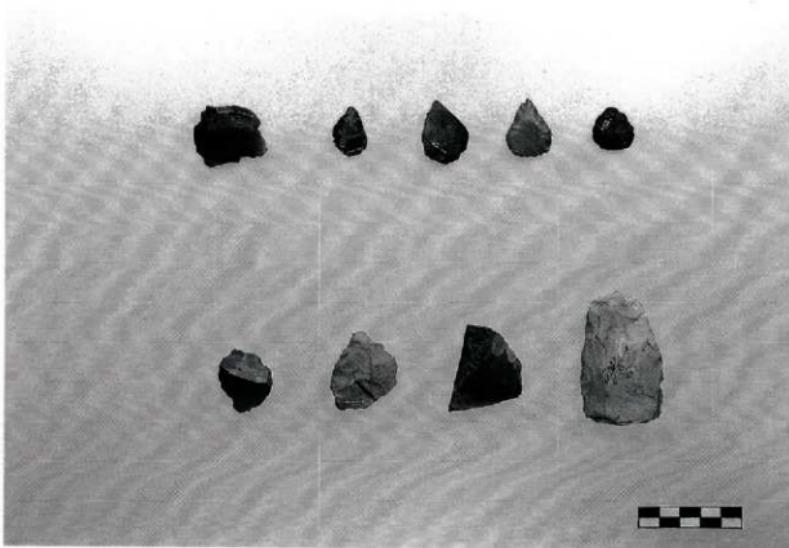
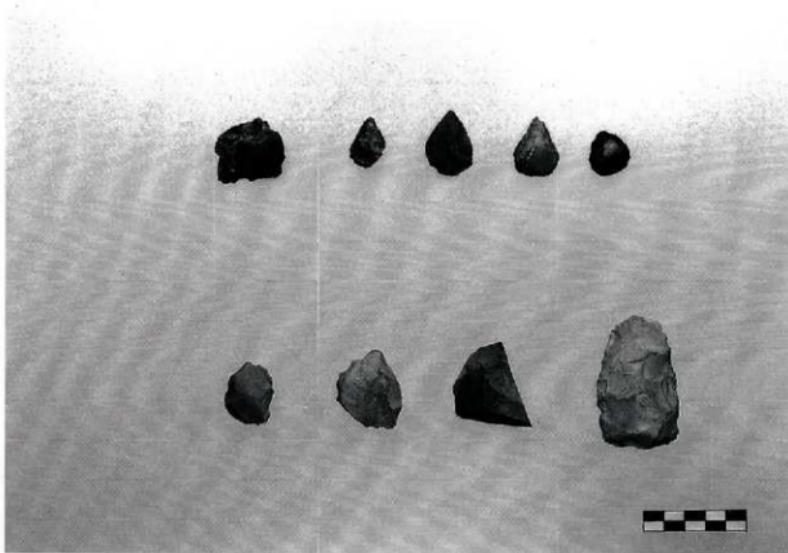


第3文化層出土石器（18層上面）

図版 23

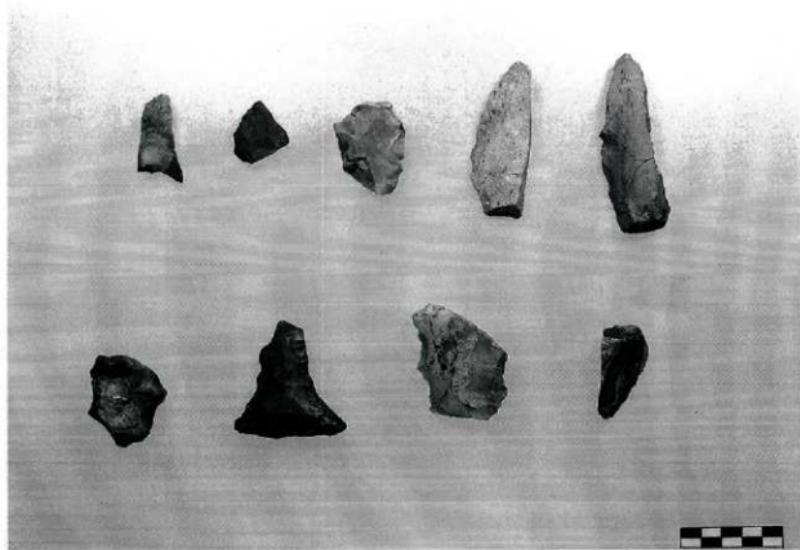
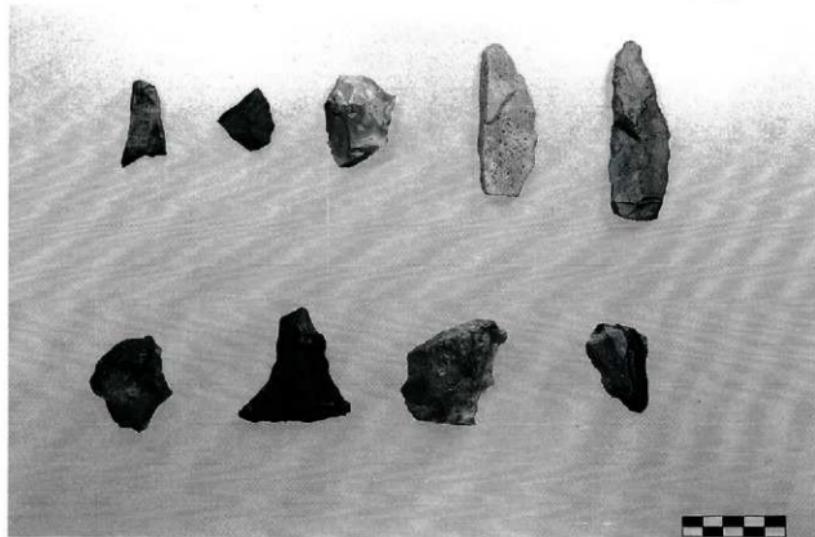


第 4 文化層出土石器 (21 層上面)

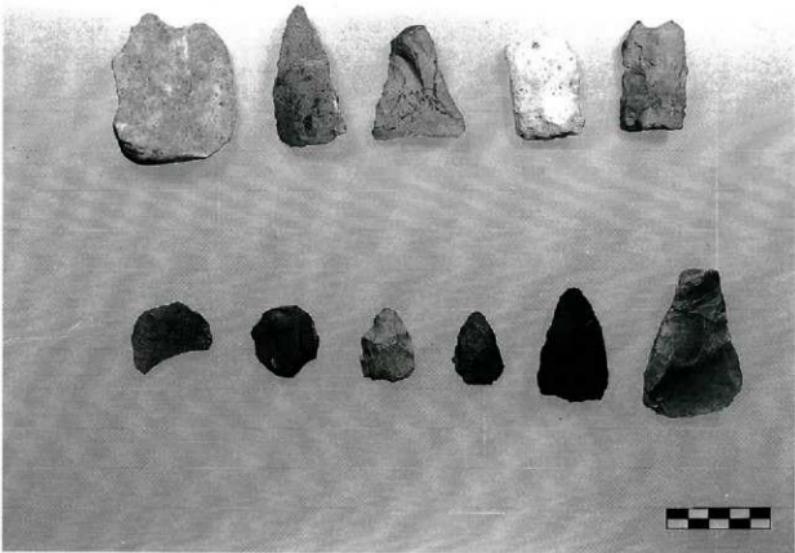
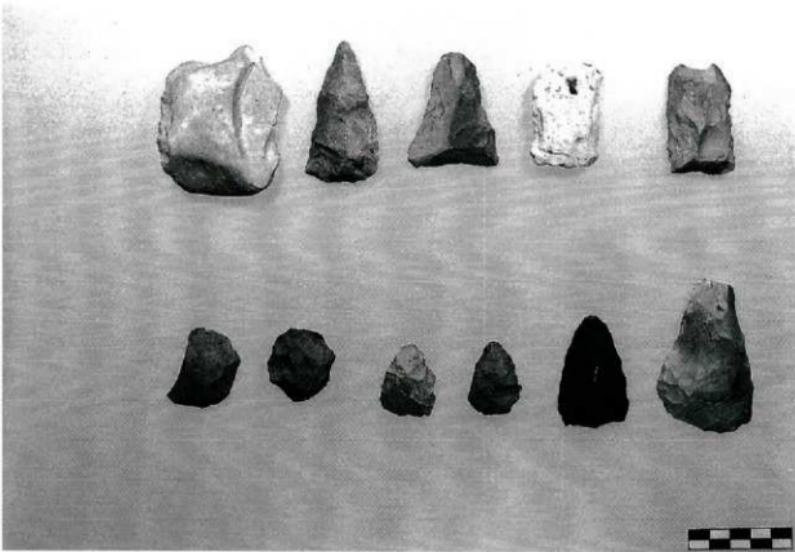


第4文化層出土石器（21層上面）

図版 25

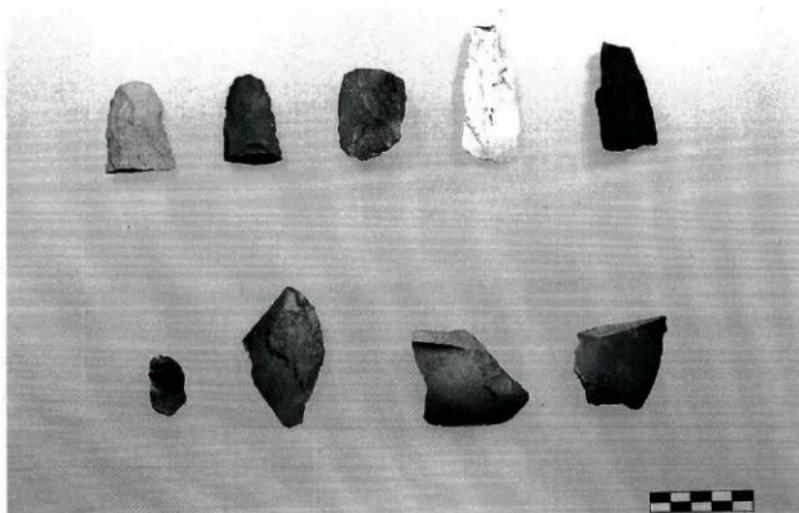


第4文化層出土石器（21層上面）

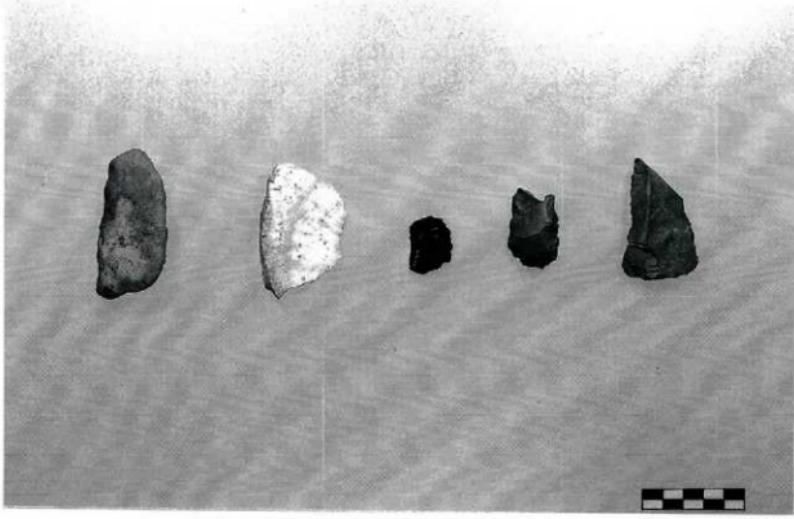
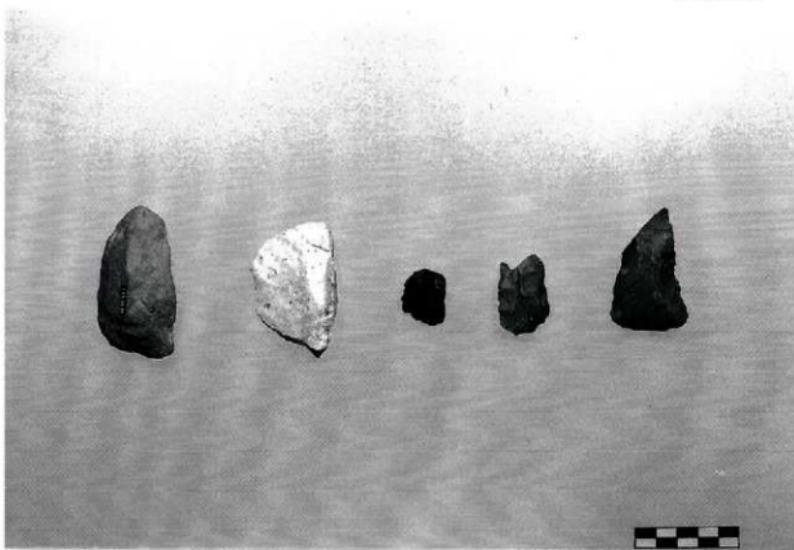


第4文化層出土石器（21層上面）

図版 27

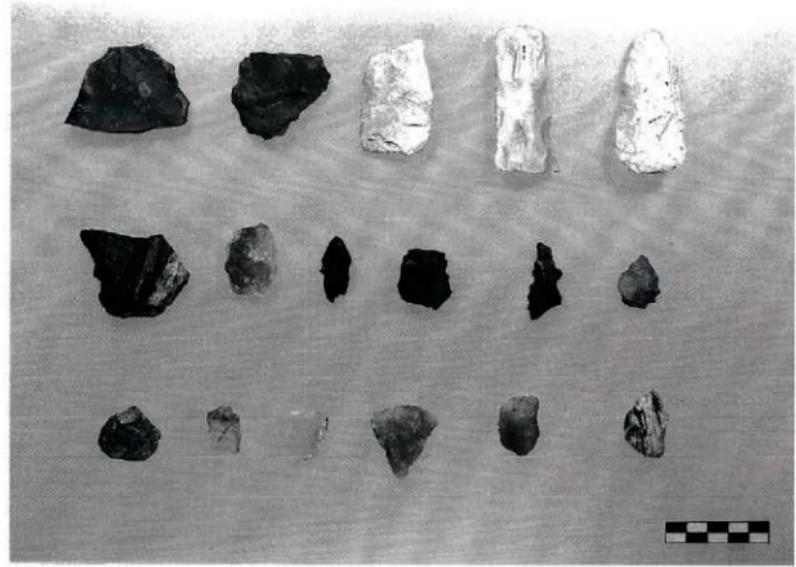
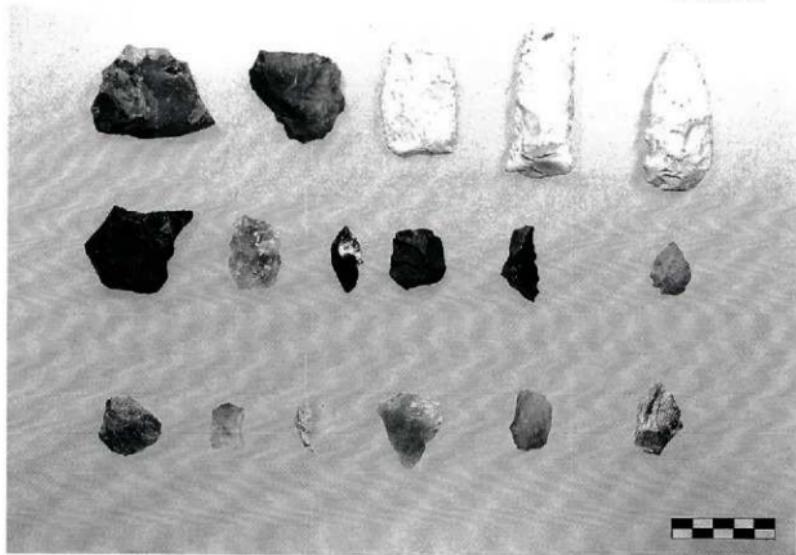


第4文化層出土石器（21層上面）

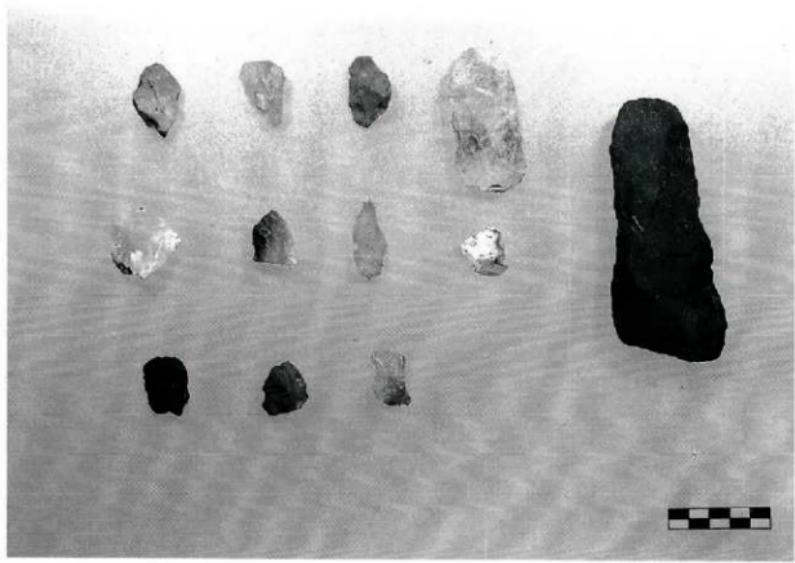


第 5 文化層出土石器 (22 層上面)

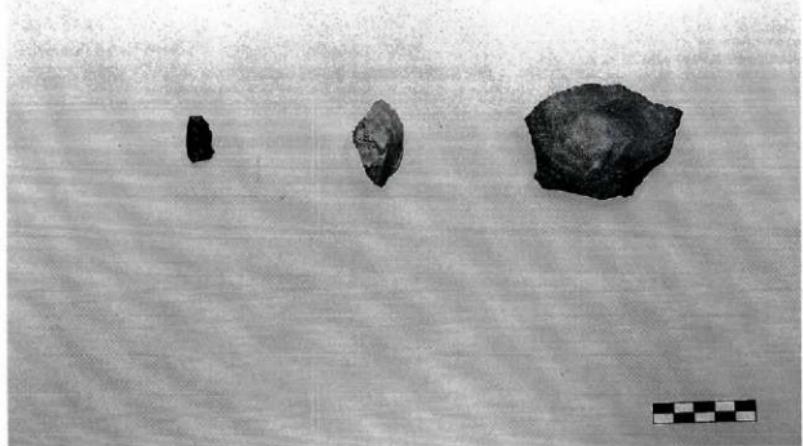
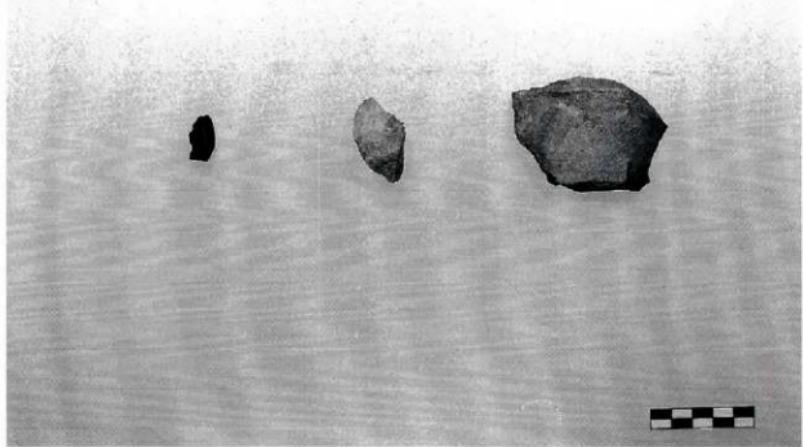
図版 29



第 6 文化層出土石器 (23 層上面)



第 7 文化層出土石器（32 層上面）



第 8 文化層出土石器（34 層上面）



袖原 3 遺跡・中島山遺跡出土接合石器

袖原 3 遺跡発掘調査報告書

2002年3月28日 発行
発行 尾花沢市教育委員会
〒999-4292 尾花沢市若葉町1-4-27
電話 0237-22-1111
印刷 (有)加藤活版所
